

「次世代の人類へ——あなたがあなたを預言するための手引き」

2021年5月9日 高塚恒夫

何ごとにも内と外とがあるように、

「次世代の人類」という言葉にも内と外とがある。

この場合の“外”とは、「次世代の人類へ」という言葉から生ずる通常のイメージであり、わたしのあとから生まれたわたしとは異なる他者という意味での次世代の人類である。では、“内”としての次世代の人類とは何か。

「次世代の人類へ」という言葉にふれるとともに生じる“わたしのメッセージ性”というものがある。そのメッセージはわたしとは異なる他者に向けられているようであるが、実はわたし自身へと向けられたメッセージであり、それは、今のわたしから生じ未来のわたしへと受け継がれていくものである。この未来のわたしが内としての次世代の人類なのである。したがって、

<次世代の人類とは、他者であり、同時に未来のわたしでもある>

ということだ。もっと言うと、

<次世代の人類とは、いわゆる他者のみならず、いまだ外的に表現されていない他者という“わたし”であり、その表現されていない萌芽が今の内なるわたしにある>

ということだ。だから、

<次世代の人類とは、今から未来へと続いている“わたし”のことなのである>。

以下は、わたしからわたしへの提言であり、それを読むことができるのは“わたし高塚”であり、“わたしあなた”である。“わたし”を持っている“わたしあなた”でなければ、ここに書かれたことは読むことができない。

以下の提言は、質問から成り立っている。なぜ質問なのかはのちほど考えるとして、まずは難問中の難問を三題。

●●<質問>1●●

「人間とは何か」

いきなり大上段の切り口である。

こんなことを聞かれて喜々として身構えるのは哲学者かへそ曲がりぐらいであろう。

わたしはへそ曲がりなのでこんなことをずっと考えている。でも、考えていただきたい。人間と名乗っていて、人間とは何かについて考えたことがないというのは変な話しではないか。

昔、人間とは道具を使う動物であるとか、人間とは火を使う動物であるとか、人間とは社会的な動物であるとか学校で習ったが、ここで聞いているのは、そんな学校で聞いた知識のことではない。

この問いに答えは、本論全体の問いと問いの答えに書かれている。この問いについてはまたあらためて取り上げるが、それはさておき、この問いは、次の第二の二つの問いへと飛躍する。

●●<質問> 2-1 ●●

「あなたは何であるか」

●●<質問> 2-2 ●●

「あなたは何になりたいか」

この二つの問いへと飛躍することが人間とは何かということをお話しているのであるが、それはさておき、昔朝日カルチャーセンターの「シュタイナーの講座」でこういうことを高橋巖先生からお聞きしたことがある。

「自己紹介をするのは意外と難しいんですね」

職業紹介、学歴紹介、名前紹介、生年月日紹介ならやさしい。しかし、それが<自己>を紹介したことになるのだろうか。去年50年ぶりに高校時代の親友と会い、酒を酌み交わした。その時、彼がこう言った。

「俺実は社長だったんだよ」

「おう、それはすごい」(全然思っていないが、社交辞令)

「いや、もっと自慢なのは部下の二人が社長と専務になったことなんだ」

「へ～え、それはすごいじゃないか」(長く生きていると嘘が上手になる)

しかし、これだけのことならさすがに書かない。俺の親友ってこんな奴だっけとなる。

しかし、そのあと二回目に飲んだ時こんな話しも聞いた。

「実は定年になってから、絵を習ってるんだ」

「おう、それはいいじゃないか。でも、おまえ絵が得意だったけ」

「いや、苦手だから習い始めたんだ」

こういう話しは無条件に好きだ。どこかほっとした。

ところで、俺は社長だった、これは自己を紹介したことになるのだろうか。
いや、確かに紹介している。社長という自己でなく、“社長だったと言う自分がいる”
という意味での自己を語っているのである。

この意味で、日常生活の私の言葉はすべて自己紹介なのである。

このことをふまえて、もう一度自問自答していただきたい。

「わたしとは何であるか」

ここではまだ答えを書かない。意味がないからだ。それにそもそも答えがあるのかも
疑わしい。

そしてさらに第三の問いとなる。

●●<質問>3●●

「これが本当のわたしだろうか」

「いま、本当のわたしなら何をするだろうか」

このレポートの登場人物はいろいろいる。「神との対話」の神、仏陀、黒住教の教祖
である黒住宗忠、ヨギのパラマンハサ・ヨガナンダ、弓の達人阿波研造、その弟子の
オイゲ・ンヘリゲル、魔術師ゲオルギイ・イヴァノヴィチ・グルジェフ、「ハトホル
の書」の宇宙人ハトホル、「エイリアンインタビュー」の宇宙人エアル・・・などな
どで、もちろんわたし高塚もいる。その登場人物のひとり「神との対話」の神の質問
である。彼女（彼）は魔法の質問と言っている。

<これが本当のわたしだろうか>

<いま、本当のわたしなら何をするだろうか>

これは<わたし>に関する質問ということでは前二問と同じ質問であるが、前二問とは少々異なる。

どう異なるかという、いつも携えておくべき質問だからである。

いつも携え、選択の岐路において自問自答すべき質問だからである。

しかし、選択の岐路でない時というのは人生にあるのだろうか。

一瞬一瞬が選択の岐路ではないだろうか。

特に「逆さまの惑星」である地球に住む住人にとっては、かじを切らずにすむ瞬間などないにひとしい。

この質問が魔法の質問たるゆえんはおそらくこうである。

21世紀の地球に住んでいるわれわれにとってはめったに出会うことのない、(本当の) <わたし>と出会わせてくれるからである。

あるいは、内と外とをつなぐ質問だからである。

この<わたし>はまだ内にしか住んでいないが、その<わたし>とこの世の私を出会わせてくれるからである。

あるいはまた、最近の日記に取りあげた話題でいくと(下記(参考)参照)、この質問はサークルをほどく呪文の質問だからである。

本論でのサークルとは個人の偏見である。逆さまの惑星の逆さまの視点である。偏見、逆さまの視点をふりほどくのは簡単でない。イェジディ派の少年がサークルから出られなかったように、

「それはできない」

ことなのである。しかし、イェジディ派の司祭が短い呪文を唱えるとその桎梏(しっこく)が外れるように、この短い二文「これが本当のわたしだろうか」「いま、本当のわたしなら何をするだろうか」によって偏見というサークルの頸木が外れてしまうのである。しかも、外すのは司祭ではないし、神でもない。外すのは、自分自身である。・・・いや、もしかしたらであるが、

<はずすのは言葉である>

そうなのかもしれない。

(参考)

以下は、グルジェフがまだ15、6歳の頃の話で、家計費の足しに仕事をしていたときの話しのようなものである。少々長いが、興味深い話しであるので引用させていただく。

その夏、やはりアレキサンドロポルで、もう一つ当時の私には説明のつかない現象に出くわした。

叔父の家の向かいに空き地があり、その真ん中にポプラの小さな木立ちがあった。私はこの場所が好きで、よくそこへ本や手仕事を持って行った。そこは町中から集まってくる、あらゆる肌の色をした子どもたちの遊び場でもあった。アルメニア人、ギリシア人、クルド人、タタール人——。彼らの遊びは実に騒々しいものだったが、私の仕事の邪魔にはならなかった。

ある日、私はポプラの木の下にすわって、翌日予定されている近所の人々の結婚式用に頼まれた仕事に精を出していた。注文は玄関に掲げるたてにその人の頭文字と花婿の頭文字を組み合わせた花文字を描くことだった。盾の余白には日付も入れなければならなかった。

ある種の強烈な印象は、記憶に奥深く残るものである。そのとき、1888という数字をどう処理するのがいいか、頭をしぼっていたことは、いまでも覚えている。仕事に没頭していると、突然断末魔の悲鳴が聞こえた。遊んでいる子供たちの誰かが事故に遭ったに違いないと思い、私は弾かれたように立ち上がった。駆けつけて行って、見たのは次のような光景であった。

地面に描かれた円の真ん中に男の子のひとりが立って、泣きじゃくりながら体を奇妙に動かしており、それを、ほかの子どもたちが遠巻きにして嗤っている。私はわけがわからず、どういうことなのかと尋ねた。

子どもたちの話しでは、中にいる少年はイェジディ派の子で、まわりに描かれた円を誰かが消さないかぎり外へ出られないのだという。その子は本当に必死になって魔法の輪から出ようとしていたが、それも無駄な努力だった。私が見かねて駆け寄り、すばやく輪の一部を消すと、その子は飛び出して一目散に逃げていった。

啞然とした私は、平常の思考能力が回復するまで、魔法にかかったように、長いことその場に立ちつくしていた。イェジディ派の話は聞いていたものの、それまでは一度もそのようなことを考えたことがなかったのだ。けれども、われとわが目でこの驚くべきできごとを目撃したいまとなつては、真剣に考えないわけにはいけなくなった。子どもたちが遊びに戻ったのを見てとると、私は混乱した頭を抱えて元の場所に帰り、花文字を書く仕事をつづけた。うまくはかどる状態ではなかったのだが、どうしてもその日のうちに仕上げなければならなかった。

イェジディ派というのはトランスコーカサス、おもにアララト山近くに住んでいる一宗派の人たちで、ときには悪魔崇拝者と呼ばれることもある。

このできごとがあつてから長年ののち、私はこの現象について特殊な実験的検証をして、事実、イェジディ派の人たちは、まわりに描かれた輪から自分の意志では脱け出せないということを見出した。その輪の中なら自由に動けるし、輪が大きければ動ける範囲も大きくなるが、外に出ることだけはできない。その人の力よりもずっと大きな不思議な力が、彼を内側にとらえて離さないのである。力のある私でも、か弱い女の人を輪の外に引っ張り出すことができず、そうするには、もうひとり私と同じぐ

らい腕力のある男手を借りなければならなかった。

むりやり輪の外に引きずり出されると、イエジディ派の人はたちまち硬直症と呼ばれる状態におちいってしまうが、輪の中に戻せば即座に回復する。しかし、輪の中に返さないと、私たちの実験では、13時間あるいは21時間経ってようやく正常に戻る。正常に戻るのにほかの方法はなかった。少なくとも、私の友人たちや私にはむりだった。現代の催眠療法で硬直症を解くのに使うあらゆる方法を知っていたのにもかかわらずである。イエジディ派の司祭だけが、特定の短い呪文によってそれを解くことができた。

(G.I.グルジェフ著「注目すべき人々との出会い」めるくまーる社 88ページ)

●●<質問>4●●

「あなたは、プレアデスという星の宇宙人です。地球滅亡の危機に、あなたたちプレアデス星人は、最後に生き残っている地球人11人をUFOに乗って救出に来ました。しかし、このノアの箱舟UFOに乗せられる地球人は10人までです。したがって、ひとり地球に残していかなくてはなりません。残ったひとは残念ながら生き残ることはできません。その選別の任務があなたに与えられています。あなたは、誰を残していきますか？理由とともに書いてください。なお、あなたが残るというのは答えとしません。

- | | | |
|---------------|----|-----|
| A 弁護士 | 男性 | 34歳 |
| B 医師 | 女性 | 32歳 |
| C 清掃人 | 女性 | 72歳 |
| D 主婦 | 女性 | 28歳 |
| E 路上生活者 | 男性 | 52歳 |
| F 幼児 | 男性 | 2歳 |
| G 総理大臣 | 男性 | 69歳 |
| H 無職の認知症患者 | 男性 | 92歳 |
| I 無職の知的障害者 | 女性 | 18歳 |
| J 無職の重度の身体障害者 | 女性 | 42歳 |
| K 五人を殺害した死刑囚 | 男性 | 22歳 |

この質問は30年近く前に代々木で治療院をやっていた時によくみえられていた患者さんから聞いた話しである。カウンセラーの講習を受けていてそこで出た話しで、「先生だったら、どうされますか」と聞かれた。わたしは「そんなものは、その時になってみないと分からない」とお茶をにごしたが、今でははっきり分かる。次にこの問いに出合ったのは、精神世界のワークショップであった。その先生も答えは分から

なかったようであるが、それはそれでよい、質問そのものに意味があるから、考えるだけでよいのである。

この問題は1年ぐらい考えて、ある日突然答えが分かった、分かったというよりも答えを与えられたという言い方がしっくりくる。その後も折ふれて、いろいろな気づきを与えてくれる質問である。

はっきり言って難問。これまで正解者は二人。
まずはご自分で考えてみて下さい。

(1)「知っていること、知らないこと、そして、知ること」1

選ぶためには地球人のことをよく知らなければならない。そして、ひとりひとりについてよく知らなければならない。われわれ地球人が地球人自身のことをどれだけ知っているかはさておき、進化した宇宙人プレアデス星人であるあなたは地球人のことはよく知っているものとする。ただ、ひとりひとりについてはよく知らない。

ここでは、人物に関して職業、性別、年齢だけ書かれている。
まず、この情報だけで人間を知ることができるか、人間の違いが分かるのかという問題がある。もちろん、これだけでは何も分からない。分からないが、分かっている感じがして、現実には、弁護士Aさんと路上生活者Eさんとは、わたしの態度は著しく異なってしまう。

以前、あるラーメン屋に入り、カウンターに座ったところ、横に母子連れのお客さんがいた。その小さな女の子の隣には薄汚れた洋服を着たホームレスまがいのお年寄りがいて、小さな子どもをさかんにあやしている。母親は迷惑そうな顔をして無視を決め込んでいる。変なおじいさんにつきまとられてかわいそうにと思って見ていたが、そのおじいさんにラーメンが運ばれてくると、しっかりと両手を合わせ、大きな声で「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と言うではないか。わが家は浄土真宗なだけに、その老人の仏壇を前にしての読経のような称名に思わず感動し、わが身の不明を恥じたのであった。

このように、悲しい偏見が自分の中にあるが、それはさておき、では、一体何を語れば、その人を表わしていることになるのだろうか。現実にある人間を差し出すことが、その個人を最適に表わしているのだろうか。ラーメン屋で見かけたホームレスとおぼしき老人はわたしの前に現実とその姿を差し出したが、わたしにはその人のことは何も分からなかった。それは女の子の母親も同じであろう。見ても分からないこと

がある。南無阿弥陀仏と称名されたことによって、初めて分かることがある。称名によりすべてが変わってしまう。称名は粗末な衣服も輝かせてしまうから、不思議である。

弁護士Aとはどのような人であろうか。
清掃人Cとはどのような人であろうか。
路上生活者Eとはどのような人であり。
死刑囚Kとはどのような人であろうか。

それは、わたしの目の前に立たれたからといって分かることではない。
弁護士バッジを胸につけていたとて分かることではない。
粗末な服装をしていたからといって分かることではない。

(2) 「知っていること、知らないこと、そして、知ること」 2 (恩人)

あなたが地球の最後に残していった人が前世であなたの命を救ってくれた人かもしれない。

そんなばかなことが、と思うかもしれないが、この世界にはこの手の奇跡的な出会いと別れの話は数多くある。

そしてまた、今生であなたはこの人に救ってもらったのである。

すなわち、この人はあなたが選択することを可能にしてくれたのである。

狭量な人生観、狭量な人間観で選ぶことを可能にしてくれたのである。

あなたが恩知らずかどうかは問題ではない。

この人はそのような人かもしれないということである。

(3) 「知っていること、知らないこと、そして、知ること」 3 (裁判官)

人間とは何だろうか、個人とは何だろうか。
現実にある人間を差し出すことが、その個人を最適に表わしているのだろうか。
たとえば、ある一篇の美しい詩を書いた人がいたとしたら、その一篇の詩とその人物本人とはどちらがその個人を表わしているのだろうか。
ここでは、一篇の詩にかえて、職業、性別、年齢が差し出されている。

職業とは一体何であろうか？ この選別に何か役に立つものなのであろうか？

では、一篇の詩であれば、この選別に何か役立つものなのであろうか？

一体、人間行為の何がこの選別に役立つものなのであろうか？

そもそも人間の行為に優劣の選別はあるのだろうか？

また、この選別に必要な情報とは何だろうか？

そのような情報とはありうるのか？

ただし、現実世界ではそのような情報はあるとして、選別が行われる。裁判がその最たるものである。

われわれは時代地域によって変わる常識や時の権力に右顧左眄するような裁判官になってはいないだろうか。

(4) 「知っていること、知らないこと、そして、知ること」4 (閻魔大王)

閻魔大王はその人の一生をスキャンして、天国行きか地獄行きかを決めるという。

閻魔様は、その人の過去生での行いは考慮しないのであろうか。

あるいは、その人の未来での行いを見ることはできないのであろうか。

五人の人間を殺しても次回の生で70億人の人間を救うかもしれない、この人間はやはり地獄行きなのであろうか。

そもそも、終わりのない生命をもつ人間という存在の価値をたかだか70年や80年の期間だけで決めるなどというのはおかしくはないだろうか。

閻魔大王は身のほど知らずではないだろうか。

そして、この質問はあなたが身のほど知らずになることを要求している。

(5) <自己規定><自他> (人間関係)

「Eさんはホームレスである」という時、もちろんその言はEさんのことを語っているのであるが、同時に、

<それは実はわたしのことを語っている>

のである。

<それはわたしが何者であることを語っている>

のである。その言葉にわたしの人生すべてが含まれている。わたしはEさんをホームレスと言わずに、

「Eさんは生命である」

と言ってもよいのである。あるいは、

「Eさんは自分が選ばれるのではないかと恐れおののいている」

と言ってもよいのである。峻別する人、本質を見る人、他者とともにいる人、その善悪のことを言っているのではない。この質問に答えることは、

<わたしは何者であるか>

<わたしは何であるか>

このことを答えることになるということを言っているのである。もちろん、これはあらゆる考え、言葉、行為について言えることである。「神との対話」の言葉借りれば、

<人生とは自己規定である>

ということだ。ただ、人間関係においては、この自己規定は“他者規定”になりがちで、これが人間関係の難しいところである。

(6) 「答え」 <わたし> <利己主義> <主観的真実> <自己規定>

ここで質問の答えは明らかになる。

わたしは裁判官にも閻魔大王にもならない。したがって、地球に残す者を選別する任務を降りるということです。この質問でいえば、「答えることはできない」「答えない」ということです。

さらにもうひとつの答えも可能となる。それはわたしが選ぶのではなくわたしが残るということです。つまり、“わたし以外の”11人から選ぶのではなく、“わたしを含めた”12人からわたしを選ぶということです。

「それでは、質問に答えたことにならないではないか」しかも「あなたが残るというのは答えとしません」としたではないか、と言われるかもしれませんが、そういう条件は無視します。

<「わたしが残る」という答えのもとでは、そういう条件は力を持ちません>。

<これはいわば高塚の<利己主義>であり、<主観的真実>であり、この利己主義・主観的真実は無条件です>。

これがわたしの答えです。・・・というか、わたしに与えられた答えです。ただ、これはいわば“与えられた答え”であり、現実の高塚がそうであるかという、そんなことはない。この答えは高塚が生きる道しるべである、ということであり、

<言葉がわたしを超えている>

そういう言葉が時にしてあるということです。

(7) 逆さまの惑星

プレアデス人であるあなたが残ると言ったので、11人の地球人は救われたと言って喜ぶかもしれない。

しかし、もしかしたら救われなかったのかもしれない。

(8) <一体>

プレアデス人であるあなたが残ると言ったので、11人すべての地球人も残ると言った。

もしかしたら、その瞬間に地球は滅亡の歩みを止めるかもしれない。

地球滅亡の歩みは宇宙の法則である。

だが、同時にプレアデス人と地球人 11 人の一体の力は創造として働くというのも宇宙の法則だからである。

あるいはまた、11 人全員が残るという選択をした時に地球滅亡という出来事の真の意味が明らかになるのかもしれない。

人生でよくあるように、

最悪の出来事が最善の出来事であったということだ。

最悪の出来事を最善の出来事にしたということだ。

そして、真の意味とは、「あなたが宇宙にしたがうのではなく、宇宙はあなたにしたがう」ということだ。

(9) くじ

よくある答えは「くじ」で決めるということである。くじは公平に見えるからである。

いま、ハロウィンジャンボ宝くじが発売されているが、1 等の当選者は公平に選ばれるのだろうか。偶然という公平によって選ばれるのだろうか。

わたしの世界観、人生観は違う。これはあらかじめ決められていることだ。今日石につまずいてころぶこととはわけが違う。宝くじに当たることはその人の人生を左右することである。こういう人生の一大事は、結婚相手と同様に、生まれる前から決まっているのである。いいにしろ悪いにしろ、そういう人生を歩むように決めて生まれてきたということである。

この「UFO 問題」も同様である。残る人のくじを引いてしまうかどうかというのは宝くじと同様にあらかじめ決められていたことである。そういう生き方をするというのは生まれる前から自分自身が決めていた人生である。

そして、ここで、残る人になるくじを引いたこと、

<それはアタリなのかハズレなのか>

という問題がある。

.....

それはまるでその人次第なのである。残り10人を救ったと思えば、当たりである。しかし、残される人になってしまったと思えば、ハズレである。

そして、当たりと思うことから残る人に志願するまではあと一步でしかない。この一步をいつも踏み出せるようになるために我々は一見ハズレに思えるくじを何度も引くことになるのである。

(10) 続「くじ」＜選択＞＜感情＞

くじに公平性はないものの——だいたい、公平などに価値を置くのは悪しき信仰であるが——くじが的確に残るべき人を選び出してくれるのであれば、それは決して悪い手段ではない。ただ問題がないわけではない。それは、自分自身の選択の機会を放棄していることである。くじに選択させてはならない。なぜなら、

＜選択は人生そのものであり＞

＜選択することこそが人である＞

ということだからだ。くじは的確に残るべき人を選択するが、あなたはそうはいかない。的確に選択などできるわけがない。11人のすべての人生を知らないし、自分自身のことすら知らないからだ(不思議だが、くじは知っている)。ただ、人はくじにないものをもっている。それは、

＜真剣に考え、悩むことができる＞

ということだ(不思議だが、人は知らないから考え悩むことができる)。人生では、一日一日が壁であり、一瞬一瞬が壁である。それが壁であるというのは、同じことを考え、同じことを口にし、同じことをするからだ。そして、それを疑問と思わぬことが壁の壁たるゆえんである。この意味で、日常を変えることが一番難しい。日常は人を同じことを繰り返すブリキのロボットにするからだ。そして、この意味で、困難なこととか不幸なこととかという非日常的事態に遭遇した時にはじめて異なった選択が可能となる。

日常では、弁護士は弁護士であり、ホームレスはホームレスであるが、ひとりを地球に残さざるをえないという非日常では、弁護士は弁護士でなくなり、ホームレスはホームレスでなくなるからだ。

私は非日常において初めて、多少なりとも色眼鏡の色をぬぐい去ることができるからである。

非日常的とはいえ、この質問は言葉だけの質問である。真剣には考えられないかもしれない。だが、この質問はもしかしたら、リアルな人生もふくめてあなたの人生での最厚の壁を破る質問かもしれない。それには、誰を選ぶかということに関して真剣であることだ。リアル以上に真剣であることだ。

高塚の答えは示した。しかし、それは未来永劫にわたる人生の変わらぬ答えなどと誰が言えようか。

わたしは、あなたに考えていただきたい。

この質問でなくともよい。

リアルといわれる世界で生ずる疑問であってもよい。

疑問、質問に真剣であること、このことだけが人生を動かし、宇宙を動かしていく。

なぜなら、真剣さから生じる<感情>こそがこの世界の動力だからである。

●●「展望」●●

質問を四つ考えていただいたところで、このレポートのおおまかなビジョンを提示させていただきます。

いわゆる進化論は信じていないが、人間存在という意味での精神の進化は信じている。このレポートは精神の進化ということで、次世代の人類が——それはわたしであり、あなたであるが——その進化を手にすることができるための道具を提供するものである。その進化とはいかなる進化かというと、“預言”である。怪しげである。しかし、一時期話題になった「ノストラダムスの予言」などの予言ではない。あなたの預言である。

<あなたがあなたを預言する>

そういう預言である。少々奇をてらった言い方であるが、問題を大きくするためである。どういうことかというと、“あなたがあなたの前に言を預けて”その言の通りに

なるということである。これが預言である。あるいは、こうも言える。

<これがわたしである>

これがわたしであると言えるための手引きであり、そのための道具を提供するものである。あるいはまた、こうも言える。

<無意識的人生から意識的人生への変換である>

そのための手引きである。意識的とは、“あなたなるあなた”を言葉としてあなたの前に預ける、あなたの前に差し出すからである。さらにまたこうも言える。

<内界と外界を旅する<時空の旅人>となる>

そのための宇宙船を提供するものである。

これらの展望は何度も何度も繰り返されて、さらに明らかになる。

●●<質問>5●●

わたしが大切にしている時計がある。

この時計は今では製造中止の珍しい時計である。

あなたは、この時計をほしいと言う。

わたしは、この時計をあなたにあげることができる。

わたしのものだからあげることができるのだろうか。

それとも、わたしのものでないからあげることができるのだろうか。

あなたはこの時計を受け取った。

あなたはこの時計を受け取ることができた。

わたしのものだから、あなたにあげてあなたは受け取れたのであろうか。

それとも、あなたのものであるから、もともとはあなたのものであるからあなたは受け取れたのであろうか。

こう考えると、もしかしたらこの時計はわたしのものでもあなたのものであるかもしれない。

だからこそ、あなたは受け取ることができたのかもしれない。

では、この時計の持ち主はもともと誰なのであろうか。

(1) ワークショップ

この質問はあるワークショップに参加したときの質問であるが、もちろんこんな聞き方をしたりはしない。そのときは20人ぐらいの参加者がいて、ひとりひとりに自分のモノを前に出させ、講師の方が「それはほんとうにあなたのものですか。それは誰のものですか」と問うのである。目的は「モノにあなたのものなどない」ということに気づいてもらうことであつたが、では「誰のものなのか」は講師の方も参加者もうまく答えることはできなかった。

これまた答えにたどり着くまでに数年かかった問いである。その答えがわかったときにはもうこの人生はいつ終わりになってもよい、これ以上のことを知るといふことはできないのではないかと思つたぐらいに深い満足感があつた。

ここでは、ヒントのつもりで散文詩にしてあるが、ヒントにならずかえって混乱を増すばかりになっているかもしれない。

答えはある意味単純であるが、難問である。まずはご自分で納得いくまで考えていただきたい。

なお、そのワークショップでわたしが出したものは、プライベートな電話番号をワープロで書き出した一枚の紙であつた。講師の方は、ひとりひとりに尋ねていき、わたしに

「それは誰のものですか」

ときいた。

「これはわたしのものです」

「ほんとうにあなたのものですか」

「そうです。この紙はわたしの友人、知人の電話番号を記したもので、他の人には意味がないものです。だからわたしのものです」

講師の方も困つたであろう。一瞬の沈黙の後、話題を変えて、

「それはもともと植物からつくられてものですよね・・・」

と返してきたが、そのあとの問答は覚えていない。このわたしの答えはヒントともなっているが、わたしの最終の答えはまるで別のものである。

(補足)

>その答えがわかったときにはもうこの人生はいつ終わりになってもよい、これ以上のことを知るといことはできないのではないかと思ったぐらいに深い満足感があった。

この思いは間違いではなかったが、間違いでもあった。

間違いではなかったというのは、<人間とは何か>ということについて、これまで考えたこともない気づきが生じたからである。

間違いであったというのは、この世界はこの知ったことを用いて体験的に創造する世界であり、おそらくはこの創造は考えもおよばないほど遠くまでつづいていくであろうことに当時は気づいていなかった。

しかし、繰り返すが、あの時はこれ以上のことを知ることはありえないことだと心の底から思ったのである。

(2) 答え1～<名詞と動詞>

現代のレオナルド・ダビンチと言われ、「宇宙船地球号」という視点を提示したバックミンスター・フラワーがこんなことを言っている。

私は地球で生きている。
けれども私が何者か、今も自分でわからない。
カテゴリーなんかでないことは、
それでもちゃんと知っている。
私は名詞なんかじゃない。
どうやら私は動詞のようだ。
進化していくプロセスだ。
宇宙の積分関数だ。

バックミンスター・フラワー著「宇宙船地球号 操縦マニュアル」184 ページ (ちくま

学芸文庫)

フラーのいう「進化していくプロセス」、「積分関数」というのはこの質問の答えに到達した時点では実感はなかった。ただ、はっきり分かったことがある。それは、わたしとは名詞ではなく動詞であるということだ。

どういうことかということ、講師の方にははぐらかされてしまったが、ワープロ用紙一枚に書かれている電話番号は他の人は持とうとしない、わたしだけが持とうとするものである。それが植物に由来するものであろうと、

<わたししか手に取らないものである>。

だから、わたしのものである。

この電話帳を手に取りするという行為(動詞)をするのはわたしだけであるという意味でわたしのものであり、

<それがすなわち、わたしなのである>。

このことは“私の電話帳”でなくとも同じである。他人の電話帳、あるいは他人の財布であれ、「これは私のものだ」と差し出したら、

<その行為そのものはそのひとのものであり>、

<その行為はその人なのである>。

わたしにはそれ以上にその人であるものというものは考えられない。これは前問のUFO問題でも同じであり、目の前にいる人がどのような人であるか、地球に残していくべき人であるか、そういう問題も確かにあるのだが、それ以上に問題なのは、

<このわたしは誰を選ぶのか>

ということである。この行為がわたしを語っていて、ある意味、この世界での世界とわたしの関係は、

<このわたしが何をするか>

という関係しかないのである。そしてわたしは、このことを通じて、<自己を規定する>のである。

(3) 答え2～「解なし」

しかし、これでは質問の答えになっていない。電話帳の紙片が植物由来のものとして、

「その電話帳は、ほんとうにあなたのものですか」

の問いを考えてみよう。この問いを堂々巡りのように繰り返して考えてみないと答えは分からないし、ただ答えを聞いても意味はないのだが、ある程度考えていただいたとして私の答えを書く。答えは、

「この質問は間違えている。答えはない」

ということである。高校生の時に数学の通信添削を受けていたが、満点はいつも20人ぐらいいた。しかし、あるときの添削問題で満点を取ったのは二人か三人であった。なぜか。問題が間違えていたのである。数学には「解なし」という答えもある。そういう問題であれば、正解者続出の「解なし」という満点の答えになる。しかし、そのときの問題はそういう問題でなく、出題ミスの問題なのである。そういう問題で「解なし」とはなかなか答えられないものである。わたしも書いたのは「答えはないと思う」という、受験数学の答えらしくない答えであった。

これは数学の問題であるからまだ正解にたどり着くこともできる。この人間生活での問題で、「解なし」にたどり着くことは至難の技である。ただ、質問が間違えている「解なし」という問題は実はとても多い。こころの片隅に置いておくとよい。このワークショップの質問も同じである。講師の方に

「何でもいい。あなたのものと思うものを出してください」

と言われると、当然のごとく出すが、これはすでに術中にはまっている。

「出せません」

が正解なのである。所有の帰属を問うことはできないのである。所有の帰属を問う質問は無意味なのである。

しかし、前述したように「これはわたしのものである」という答えはあるのである。

(4) <主観的真実>

重要なことなので再度書く——何しろ、数年かかって答えに到達したのであるから——

わたしが出した一枚の紙に書かれた電話帳、この紙はわたしのものでないかもしれない。

さらに言えば、このわたしの体もわたしのものではないかもしれない。

しかし、わたしがこの一枚の紙を出したという

<この行為、この選択、この動詞、これはわたしのものであり>、

<これがわたしである>

ということだ。わたしが使う紙も体もわたしのものではないかもしれないが、わたしが選択すること、行為すること、この動詞はわたしのものであり、この行為はわたしであるということだ。

さらに言うと、一番の問題は、

<これはわたしである>

という、そういう選択、行為、決断をしているかどうかということだ。“ジュースのボタンを押されると必ずジュースを出す”自動販売機のような選択をしていないかということだ。

UFO 問題でも語ったように、残すべき人が誰なのか、ということが問題ではない。誰々を選ぶこと、そして選んだ行為が

<これはわたしである>

と言えるかどうか、これだけが問題なのである。そして、真の<利己主義>も真の<主観的真実>もここに帰するのである(利己主義、主観的真実についてはあらためて書く)。

・・・・・・以下、次回に続きます・・・・・・

「次世代の人類へ——あなたがあなたを預言するための手引き」(2)

2019年12月2日 高塚恒夫

(5) バックミンスター・フラー、グルジェフ

<これがわたしである>

そのように言い切れる選択の瞬間などそうそうあるものではない。

以前、路上でばったり知人の女性と会い、その方が本を出されたばかりであったので、一緒に本屋に入り、その方が書かれた本を購入した。そのあと喫茶店でいろいろお話しをしたのだが、その購入した本は「最近中高年の自殺が多いので、そういう方を救うために書いた」のだという。こころがけは立派であるが、「わたしは自殺は悪いことだと思っていないのですよ」といい、場が冷たくなってしまった。

以下は、上述したバックミンスター・フラーが貧乏暮らしをして絶望的状況にあった時の話で、訳者芹沢高志による注釈の一節である。

一家の生活は苦しかった。シカゴのスラムの安アパートに住み、隣りはアル・カポネのところの殺し屋だった。フラーは妻子を妻の実家に帰し、自分は自殺することを考えた。「乳幼児を抱え、文字通り一文無しだった。私は自分に言い聞かせたんだ。最善を尽くしたのにうまくいかなかった。たぶん私の能力が足りなかったんだ。みんなそう思っているらしいし、実の母親でさえ、いつも私のことを能無し呼ばわりしていた。きっと母親の言うとおりになんだ、とね。」(ロナルド・グロス著『アメリカ流クリエイティブ・ライフ』紀田順一郎訳、TBS ブリタニカ) ある晩、フラーは一人アパートを出ると、ミシガン湖畔まで歩いていった。カナダ側から激しい風が吹きつけており、波が彼の足を洗った。このまま死んでしまおうか？ しかし、彼は思いとどまる。そして決心した。「人は自分自身で考えねばならない。もう一度、自分だけでこの宇宙と向かい合ってみよう。自分の言葉で、自分の経験だけを信じて、もう一度宇宙を見直してみよう」。自殺の代替案として、自分のコスモロジーの構築を思いつくとは驚きである。彼はその後二年間かけて、自分が本当に信じられる宇宙像をつくりあげていった。このエピソードは、ノーベル物理学者リチャード・ファイマンのことを思い出させる。ファイマンもまた、他人の言葉をそのまま真に受けることを拒絶

したため、物理学のほとんどを再発見していかなければならなかった。彼はそれまでの量子力学が理解できなかったので、五年間かけてそれを再発見していったといわれる。彼の量子力学は私家版だった。誰にも分からない図形(のちに「ファイマン・ダイアグラム」と呼ばれるようになる)を黒板に描きながら、答えを求めていく。その答えは長大な計算から求められる答えと全く同じだったが、どうしてそれが導き出されるのか、誰にもわからなかった。彼は無視された。ファイマンが認められるためには、科学の言葉(数学)に長けたもう一人の天才、フリーマン・ダイソンの登場が必要だった。バックミンスター・フラワーの場合も、ファイマン同様、徹底した幾何学的図形的アプローチによって、私家版コスモロジーを構築していく。

(バックミンスター・フラワー著「宇宙船地球号 操縦マニュアル」156 ページ・ちくま学芸文庫)

グルジェフは弟子の少年フリッツ・ピーターズが自殺を試みた翌日、彼をじっと見て自殺を試みたことを見抜き、「自殺するなら本気でしなければならない」といった。どうということかという、

<死ななければならぬ>

ということだ。死ななければ、変わらないということだ。死んで生まれ変わらないと変わらないということだ。「死んだら元も子もない」といわれるかもしれないが、死んでも生きかえる(わたしはそう思っている。時間は戻すことができると思っっている)。本気で生き、本気で死に、本気で生まれ変わりたいのであれば、生きかえる。問題は、

<本気かどうか>

ということだけである。バックミンスター・フラワーが死んで生きかえたかどうか、それは分からない。分からないが、彼は死のうと本気で思ったのであろう。だから、本気で生を選択し、行為したのである。それが意味究極の選択のひとつであり、

<これがわたしである>

ということだ。

(6) 自己伝授

先日ある方から気を教えてもらいたいというメールをいただいた。遠隔治療を二か月間させていただいた方である。とても感じの良い方なので、ご要望に沿いたいのは山々である。だが、こうした“力”を他人に伝えるということはありえないというのが自分の立場である。これはグルジェフから教えてもらった話しであるが、

<伝授は自己伝授しかありえないのである>。

すなわち、

<自らの内から生ずるものを自ら手にする>

このような形でしか伝えることはできないのである。だから、もし気について教えるなどということができるとしたら、この<自らの内から生ずるものを自ら手にする>ことについてお教えするということになる。誤解を生じやすい言葉であることを承知でいえば、啓発講座のようなものになるということである。人として成長すること、人として変容することをお教えするということである。

だが、仮に成長、変容を望むとして、このような成長、変容は教えることができるようなことなのだろうか。もちろん、そういうこともないではない。しかし、そんなことで終始するのであれば、わたしは気功教室などしない。そうではなく、対面で生じること、三人で生じること、四人で生じること、この生じるものがあるからこそやるのである。そしてその生じるものこそが互いにとっての“生命”なのである。さらに言うと、その生じるものは、教室で生じるものだけが生命ではない。日常の対人関係で生じるものもまた、気を習いたいという人にとって黄金の教えとなる。前者は人を昂揚させるが、後者は人を落胆させ悩ませる。どちらも気を習いたい人にとっての成長、変容の場である。もちろん、気を教える人にとっても同じ話しである。なぜなら、

<森羅万象のみならず、人の営みすべてが神であり、仏陀であるからだ>。

では、この日常における自己伝授はどのようにして可能なのだろうか。

それは上記の日常生活における人間関係が象徴的な場である。仕事、勉強、家事もふくめた日常生活において楽しいことはたくさんあるし、満足感もあるだろう。だが、その量は別として、“質”として圧倒的なものは不愉快なことである。不愉快なことは一日24時間のたった1分間だけであっても喉に刺さった魚の骨のように消えてなくなるからだ。この1分間は一日の23時間59分を台無しにする。いや、場合によったら一生を台無しにする1分間なのだ。そして、その1分間は何度も何度も

繰り返されて生じる。いつまで繰り返されるのか。それは、

〈まるで異なる視点で見るようになるまでだ〉。

〈まるで異なる視点で見るようになり、まるで異なる選択をするようになるまでだ〉。

すなわち、

〈異なる生き方をするようになるまでだ〉。

そのようにして生じることのひとつが“病気を治す気”であるということだ。
そのような気は伝授することはできない。

伝授は不愉快な状況の中で新たな選択をするという、このことによるのみ可能なのである。

(7) 仏教の知識

都立大の哲学科は東洋哲学の先生がいなかったので、確か早稲田の先生だったと思うが、講師をお願いして仏教関係のゼミを開いた。ところが人が集まらず、招聘した先生が「お願いした先生はとても偉い仏教学者なので、あまりに人が少ないと立つ瀬がない。自分のゼミの代わりにそちらの方に出てくれないだろうか。出てくれば自分のゼミの単位はあげるよ」という。まあ、よほど集まらなかったのであろう。ということで、そのゼミに出席したのであるが、一回目は普通どおりのゼミであったが、二回目からは態度ががらっと変わってふてくされて棒読みにしゃべるだけしゃべって終わるという形で終始した。学生のやる気がないのをみてとったのかもしれないが、記憶する限りこちら側はそんな失礼な態度ではなかったと思う。

思うに、この先生は自己伝授というのをご存じないのではないだろうか。頭がいいだけに覚える知識、理解できる知識、それだけに終始して、自らの内から生ずる知識というのを手にされたことがなかったのではないか。・・・他の学問であればそれでもいいかもしれないが、よりによって仏教学にたずさわっていて知識が身につけていないとは、何とも悲しい話しではないか。その先生の知識の万分の一の“仏の教え”、これを自らに伝授することこそが代々の仏祖がお伝えになったことではないだろうか。

他人に手渡せる知識をもっていれば、大学の先生になれる。論文も書ける。

しかし、それでは仏陀にはなれない。仏陀の弟子にもなれない。

<仏陀は手渡せる知識は持っていない>。

だから、覚醒した時に入滅しようとしたのだ。この世界にいることの意味もないし、覚醒した自分自身を他者に伝えることができないと思ったからだ。

だがまた皮肉なことは生きているということは、この仏教学者のように、伝えられるものを手にして他者に伝えていくことだ。自分でないものを自分のもののようにして他者に伝えていくことだ。

さらなる悲しい出来事はこの伝えられるものに著作権とか特許権とかいって無償で手渡すことさえ拒むことさえあることだ。

それは俺のものだというのが、“まさにそう言ったことそのもの”が俺のものなのだ。

みなが使え知識を早く見つけたからといって、報酬なしに使わせないとする・・・これは餓えた鬼の世界である。

●● 質問6 「もっとも大きなもの」～<わたし><動詞> ●●

この世界でもっとも大きいものは何であると思うか。

そのもっとも大きなものにふれたことはあるだろうか。

(1) パスカル

世界といって、何を意味しているのか、という疑問をもたれる方もあるかもしれませんが、まあ、この世界という自然な感じで答えてください。

この質問に対するいちばん素直な答えは、「宇宙」でしょう。わたしがこれまで聞いた返答例をあげてみると、「宇宙」「空」「太陽」「海」「愛」「こころ」「神」……などがあります。どの答えもそれこそ気の大きくなる、すばらしい答えです。あなたは、何と答えたのでしょうか。

ここでは、もっとも普通の答え、「宇宙」ということで考えてみます。(普通とは、普通(あまね)く通る、という意味です)

宇宙の大きさはどのくらいかという、諸説ありますが、おおよそ 780 億光年との

このようです。光の速さで旅をして 780 億年かかる距離が直径の大きさということです。人生 78 年として、光速ロケットを使って 10 億回の人生をかけて旅をする距離です。想像を絶する大きさとも言えますし、通常使用する大きさの数の範囲内という意味では、意外と小さな感じもします。ただし、光速という非日常的な速度を基準にしているからで、宇宙と地球の大きさをメートル法で比較してみると、その膨大さが日常的なスケールで実感できます。

宇宙を地球の大きさとしてみた場合、地球はどのくらいの大きさになるかを調べてみます。

地球の大きさを宇宙の大きさとしたとき、直径 0.5 ミリの大きさの空間にあたる大きさをイメージする。さらにまた、その 0.5 ミリの空間の大きさを地球の大きさとしたときに 0.5 ミリに当たる空間の大きさが地球です。

宇宙と地球の大きさを比べた場合、地球を中心にとすると、宇宙の大きさは想像を超えた大きさとなり、宇宙を中心にとすると、地球の小ささは想像を超えた小ささとなります。

このように、宇宙は地球と比べると途方もなく大きい。では、宇宙を人間と比べるとどうなのか、と考えた人がいます。パスカルです。

「人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。これをおしつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一つの蒸気、一つの水滴もこれを殺すのに十分である。しかし宇宙がこれをおしつぶすとしても、そのとき人間は、人間を殺すこのものよりも、崇高であろう。なぜなら人間は、自分の死ぬことを、それから宇宙の自分よりずっとたちまざっていることを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから我々のあらゆる尊厳は考えるということにある。我々が立ち上がらなければならないのはそこからであって、我々の満たすことのできない空間や時間からではない。だからよく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。」

(「パンセ」上巻 219 ページ 新潮文庫)

地球は宇宙と比べると塵以下の大きさである。さらに、直径 1 メートルの地球儀があるとすると、その地球儀の表面に厚さ 2 ミリの層の大気があり、その中で人間は生活している。この意味で、人間は巻尺のスケールでは宇宙から見たら 0 のような存

在である。しかし、とパスカルは言う。たとえ、宇宙の出来事のちょっとしたことで、人間が減んだとしても、人間は<崇高さ>というスケールでは宇宙よりも大きい。

なぜならば、宇宙は何も知らないが、人間は自分が死ぬことを知っているし、宇宙が人間よりもずっと大きい存在であることを知っているからである。

だから、人間は138億年という宇宙の年齢や780億光年という宇宙の大きさと比べることは人間の本質に合わないことである。人間にとっての尊厳とは考えて知る、ということにあり、この点で人間は宇宙よりもはるかに大きな存在である、と言えるのである。

パスカルは人間より宇宙がどれほど大きいかということより、宇宙の大きさを知っていることの方が大きい、と考える。

知っているというのは確かに不思議なことです。

あなたは、そのあなたの大きさを知っているでしょうか。

また、

あなたは、そのあなたの小ささを知っているでしょうか。

昨日、「NHK スペシャル宇宙」の本を読みながら寝ました。太陽とその他の惑星の大きさが比較してある絵を見ただけです。小さい頃から何度見たか分からない絵です。太陽と惑星のことはもう十分に知っていることです。でも、ゆうべ見て、その太陽系をまざまざとイメージして太陽系を感じたとき、新たに知ることができました。何を知ったのかはうまく言えませんが、それはパスカルが

「我々が立ち上がらなければならないのはそこからであって、我々の満たすことのできない空間や時間からではない。」

という場所にわたしがいたということです。そこにいれば、そこから立ち上がれば、人は人を押しつぶすような圧迫感から抜け出すことができます。新たに知ること、新たに感じること、新たにイメージできることで人は自分自身の大きさを感ずることがあります。それは、驚きであり、崇高さであり、感謝であります。

あなたは、あなたの大きさを知るでしょうか。

あなたは、あなたの小ささを知るでしょうか。

知ることができる、というのは不思議なことです。

知るようなあなたでいるからです。

あなたが牛や馬であれば、パスカルのように知ることはできません。

あなたを人間と呼ぶか何と呼ぶかは別として、あなたは知ることができる存在である、ということです。

同時に、知ることができるのに、知らないでいた、ということもまた不思議なことです。

知らないでいたから、知ることができるからです。

もっと知ることができる存在であるのに、今もまた知らないからです。

ともあれ、パスカルは考えることができる、知ることができるという点で、宇宙より人間の方が大きいと言いました。このように見方を変えると、大きさが変わってしまうということは実はこの世界に限りなくあります。

世界一のお金持ちはアメリカのビル・ゲイツかもしれませんが、ひょっとすると全てを捨てて出家したインドの托鉢僧の方がお金持ちなのかもしれません。

また、万巻の書物を読んだ大学の研究者よりも毎晩夜空を見上げて黙想するだけの羊飼の方がはるかに多くのことを知っているのかもしれません。

「善人なおもて往生す。いわんや、悪人をや」と言って、悪人である親鸞聖人の方が善人よりも救われるのかもしれません。

(2) 魔法の鏡

ここで質問の他の答えに目をむけてみます。

「宇宙」 「空」 「月」 「海」 「愛」 「ころ」 「神」

「空が一番大きい」「太陽が一番大きい」「海が一番大きい」と答えた人は、もちろん宇宙の方が大きいことは知っていますが、空のこと、月のこと、海のことの方をよく知っているから、そのように答えたのでしょう。身近に感じられる大きさ、あるいは、過去に体験した崇高さ、あるいは、空、月、海にある精神性、それらが宇宙を選ぶのではなく、空、月、海を選んだ一因となったのでしょう。

わたしは空のことを知っている。

わたしはいま青空を見上げる。

それは天気予報のいう空とは違う。

真っ青な吸いこまれそうな空を見上げるとき、
わたしは、その大きさ、美しさ、不思議さを感じ取り、
そしてまた、ここにいるわたしという存在の不思議さを知る。
わたしは空のことを知ったときに、空は大きいという。

だから、宇宙よりも空の方が大きくなったり、ときには、小さなこどもの瞳の中に無限大を見たりすることだってあるのです。

だからまた、大きさとしては見ることの出来ない「愛」「こころ」「神」に大きさを見ることがもできるのです。

「愛」を知らない人は愛をあしげにできる。
そして、憎しみに生きる。
「こころ」を知らない人はこころを足げにする。
そして、わたしは肉体であるという。
「神」を知らない人は神を自分以外のところに求める。
そして、あの人は神であるという。
知らないものを見ることはできない。
見ることができないものは、その大きさは分からない。

その意味で、何を最も大きなものと答えたかで、自分自身の<知る>ことの現在を指し示しているといえます。

「宇宙」と答えれば、今宇宙のことを知っている。
「月」と答えれば、今月のことを知っている。
そして、「こころ」と答えれば、今こころのことを知っている。

言葉というのは不思議なもので、力を持っています。今あなたが最も大きいものと答えた、「宇宙」「空」「月」「海」「愛」「こころ」「神」は、あなたにとって<実際に>最も大きいものです。最も大きいということはあなたよりも大きい。この世界で最も大きいものは、大きいだけでなく、<今はまだ小さいかもしれないあなた>の預言の実現への手助けともなってくれます。

ここで、あなたがもっとも大きいものと答えたものへと通じる扉を開けてみます。これは、魔法です。疑わずに使うか否かによって、魔法のランプにもなりますし、単なるランプで終わることにもなります。簡単なことですが、魔法とはそうしたものです。

どういうことかという、今日これから、ノートを買ってきてください。新しいノートを。小さいノートでも大きいノートでもかまいません。そして、そのノートの表紙にあなたが考えたもっとも大きいものの名前を書いてください。宇宙なら宇宙、空なら空、月なら月と表紙に書きます。そうすると、その瞬間からこのノートはもっとも大きいものへと通じるノートになります。このノートを開くと、その向こう側はあなたが答えた「もっとも大きいもの」の世界です。あなたはそのノートを開くたびに、「宇宙」「空」「月」と通じます。そして、あなたは時に、そのノートから、その「宇宙」「空」「月」から、インスピレーションを受けます。そのインスピレーションをそのノートに記すうちにあなたの大きさが変わっていきます。インスピレーションは言葉でも、絵画でも、音符でも、何でも構いません。そのインスピレーションを記すうちにあなたは変わったと感じる瞬間がかならずきます。

今までもインスピレーションがときにあなたを訪れたかもしれません。そのような瞬間は誰にでも体験があるはずですが、その訪問をどのように迎えたかは分かりませんが、今までは<世界>の方があなたを訪れたのです。

<しかしこれからは、あなたが<世界>を訪れるのです>。

そう、<世界>とは「宇宙」であり、「空」であり、「月」、「海」、「愛」、「こころ」、「神」とあなたが呼ぶものです。あなたがこの世界でもっとも大きいと答えたものです。

このノートは“魔法の鏡”です。開けば、そのノートの“鏡”の中に「あなたにとって最も大きなもの」が見えるでしょう。

ただの鏡でしかないか、魔法の鏡になるかは、あなた次第です。素直であれば、魔法は実現します。素直でなければ、実現まで時間がかかります。信じれば、魔法は実現します。信じなければ、魔法は実現まで時間がかかります（そして、知っていれば、魔法は実現しています）。

ただし、条件があります。

- 1 まず、ノートを買う
- 2 表紙に名前をつける
- 3 ノートを開いてみる

この三点です。なんだ、当たり前のことじゃないか、と思わないでください。精神世界に興味をもたれている方は、書店に山ほど積まれた本を片っ端から読んでいきま

すが、その中に書かれてあることを実際の行動に移される方はとても少ないのです。読むだけでは何も始まりません。昔、高校生のとき、柔道の最初の授業で先生が「柔道は会得でなく、体得である」ということを話されました。会得とは頭で分かること、本を読んで分かること、説明を聞いて分かること、体得とは体で分かること、実際にやってみて分かること。柔道とは体得するものであり、会得では柔道のことは分からないというお話でした。精神世界も同様です。あなたの手足、身体を使って、その世界がほんとうに開けてきます。「ノートを買って、そのノートに名前をつけ、毎日、そのノートを開く」。この身体作業を通じて、あなたがもっとも大きなものと答えたその<世界>から実際にメッセージが届きます。これが体得です。この三点を実際に行うまでは、柔道の会得にすぎません。

あなたの作ったノートはいわば、神棚であり、仏壇です。20世紀までは、高価な神棚や仏壇を買って、それに手を合わせたり、巫女さんやチャネラーにご託宣を求めたりする時代でした。しかし、これからは違います。神棚、仏壇はあなた自身のノートです。神仏は神社、仏閣から抜け出て、あなたのノートから出てきます。誰かを通じて神仏、創造者の声を聞くのではなく、あなた自身が最も大きなものの声を聞きます。あるひとはそれを神と呼び、ある人は仏と、ある人は創造主と、ある人は宇宙と呼ぶものと通じます。その最も大きいものとあなた自身が通じるのです。<それ>は、あなたが何者なるかについて、いつもアドバイスをしてくれます。だから、どんな小さなインスピレーションでも、書き留めるようにしてください。大きなものの声は実は最も小さな声であり、耳をすましていないと、こころをすましていないと、聞き逃してしまうからです。

(3) 補足～<知識>

1654年11月23日 月曜日 夜10時半ごろから12時頃まで

火

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

哲学者や、学者の神ではない。

確実、確実、感情、歓喜、平和、

イエス・キリストの神。

わたしの神、またあなたがたの神。

あなたの神は、わたしの神です。

この世も、何もかも忘れてしまう、神のほかには。

...

教祖に洗脳された弟子が書いたとしか思えないような稚拙な文章であるが、これが何と天才ブリーズ・パスカルがしたための覚え書きである。10歳にもならないうち

に「三角形の内角の和が 180 度である」ことや「1 から n までの和が $(1+n) n/2$ である」ことを証明してみせたという。16 歳の時に「円錐曲線試論」を発表し、のちには確率論を創始し、有名なパスカルの原理を発見した大天才である。後年の科学者がパスカルが信仰生活に入らず、科学の研究にいそしんでくれていたらどれほどの発見をしたらどうかと嘆息したという。そのパスカルが何とも舌足らずな覚え書きを残しているのが上記の言葉である。

この覚え書きはパスカルの死後、胴衣の裏が厚くなって何かが縫いこまれているようで、これに気づいた召使いがほどいてみたところ、出てきたものである。縫いこまれていたのは、この体験を忘れないためであろう。そして、この舌足らずな言葉づかいはパスカルの感動の大きさを表わしているのであり、彼が愚鈍であったわけではない。

パスカルは火の中に神を見た。1 時間半、神を見ていたのである。

これがパスカルの知るということである。

哲学者の知でもないし、学者の知でもない。

だから、読んでも分からない知なのである。

シッダールタが覚醒した時に、彼が知った世界を人々に伝えようとは思わなかった。伝えられないからである。パスカルも同じである。だからその 1 時間半の火とともにいて知った世界を、彼は覚え書きにして胴衣に縫いこんだのである。そして、その世界の一端を未完とはいえ、誰にでもわかる「パンセ」として残したのである。

だから、宇宙より大きいものは、考えて知るということなのである。

別の言葉がゆるされるなら、考えて考えて考え、悩んで悩んで悩み、そして、驚き、知るということなのである。

パスカルは 29 歳の時に父を亡くし、姉は結婚、妹は修道院に入っしまい、火の中に神を見た当時は、孤独の中の失意のどん底にいたのである。

(4) <わたし>

あなたの大きさは誰も知らない。

もしかしたらあなたは、ノーベル平和賞よりも崇高であり、

もしかしたらあなたは、アメリカ大統領よりも影響力をもち、

もしかしたらあなたは、ダ・ビンチのように創造的であり、ガンジーのようにやわらかであるかもしれない。

もしかしたらあなたはそのような存在かもしれない。

あなたの大きさは誰も知らないが、
あなたはこのことを知ることができるかもしれない。
パスカルが火を見て知ったようにして知ることができるかもしれない。

宇宙が大きいからといって、宇宙を恐れて自分を小さくする必要はない。
ノーベル賞受賞者が偉大だからといって、あなたが卑小であるわけではない。
アメリカ大統領に会ったからといって、あなたが縮こまる必要はない。
ダ・ビンチが創造的であるからといって、創造されたあなたより創造的であるわけではない。
ガンジーのように生きることができないというのが、たったいまこの瞬間にガンジーのようにして生きようと思うことはできる。

すべては、あなたの外にあるのではなく、あなたの内にあるのである。

(5) 金粉

鍼灸学校を卒業して代々木に治療院を開いてやり始めたことは、鍼灸治療ではなく、気功治療であった。資格は取ったものの鍼灸は自分には合わなかったからである。自分自身が鍼を打たれて気持ちよくならないのに、他人に鍼を打つわけにはいかない。当時は夜勤の仕事で食べていくことができたので、気功治療はボランティアとして始めた。なぜボランティアにしたかというのと、「ただで与えられたのだから、ただで与えなさい」ということかもしれない。何よりも気功治療は自分の力でやっているとは思えなかったのである。無料というわけではないが、治療院の維持費をご寄付としてお願いするという形で始めた。

そのような次第で案内のパンフレットを見られた何人かの方がボランティアとしてお手伝いに来てくださった。そのうちのおひとりは、当時騒がれたサイババの日本センターでもボランティアとして働かれていたので、その方を通じてサイババについて勉強させていただいた。すごい人がいるものだと思ったが、そののち分かったことは、どうも手品を使って信者を騙していたようである。しかもあろうことか男児の性虐待もしていたのではないかという話もあり、何ともいわく言い難い人物であったようだ。

ところで、そのサイババを信奉されていたボランティアの女性であるが、ある時痛みを取るというグッズを差し上げた。当時その世界に疎かった無知な私に色々なグッズを持ち込む方がいて、結構なお金を払って仕入れていた。そのうちのひとつに小さなスプレーがあった。スプレーの底にあるゴムに秘訣があるということで、そのスプレーに水を入れると痛みが取れる水に変わるという代物(しろもの)である。効く人には効いたのだからまるで偽物でもないのだが、それはどうでもいい。問題は、その

方にグッズを差し上げて次にお見えになられた時、

「先生、このスプレーに金粉入っていました？」

と聞くのである。見ると、確かにゴムのところに金粉がついている。いや、ついているのではなく、ゴムの中に入り込んでいるので、爪でこすっても取れないのである。もちろん最初から金粉が入っていたわけではない。その方が持たれたからゴムの中に金粉が生じたのである。その方はサイババのおかげだと思ったようであるが、わたしから言わせればそれは違う。それは、サイババという他人でなく、その人自身が出したもののなのである。

<サイババが偉大なのではなく、その人自身が偉大なのである>。

(6) 囲碁棋士安田泰敏九段

囲碁のプロ棋士に安田泰敏九段がいる。先ほどネットで調べたら昨年2018年の5月に亡くなられていた。まだ54歳の若さであった。善人は早死にするという。もちろんすべての人にあてはまる話しではないが、安田九段の死を知り、まず思い浮かんだ言葉である。

もう20年以上前になると思うが、「週刊碁」で安田九段が連載のコラム記事を書いて知った話しである。安田九段が知的障害者の施設に囲碁を教えに行くという話しを同僚の囲碁棋士にしたところ、障害者が囲碁を打てるわけがないからやめておけと言われたという。しかし、実際に行くと教えると囲碁ができるようになった。ただ、ここでの話しはその先の話しである。施設で少年同士囲碁を打っているのを見ていた安田九段が驚いた話しである。A君とB君が囲碁を打っていて、A君の方が強く有利な局面になる。ある場所に打てばその碁は終わりA君の勝ちになる。もちろんA君はそのことを知っている。しかし、A君はじっと考えている。A君の実力からしたら考える局面ではないのに考えている。そして、そこに打てば勝ちというその場所に打たずにまさかの場所に打つ。そこに打てばB君が勝ちになるその場所を選んで打ったのである。B君は勝てないA君に勝って大喜び、その喜ぶ姿を見てA君もまた大喜びをしたという。

日本で一番囲碁が強いのは井山四冠であろう。だが、もしかしたらA君の方が偉大であるかもしれない。井山四冠はA君の境遇に立った時、はたして負ける場所に打つことができるか。わたしは疑問に思うからである。

もちろん、わざと負けることが偉いのではないし、偉大なのではないし、大きいのではない。

ただ、ある瞬間のある場で、相手が喜ぶのを見たいという心象風景が絶対的なものとして生ずるのである。

この心象風景が生じ、それを実現するというのは、世界で一番強い囲碁棋士の強さよりも崇高なのである。

これは、パスカルが言った

「人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。これをおしつぶすのに宇宙全体が武装する必要はない。一つの蒸気、一つの水滴もこれを殺すのに十分である。しかし宇宙がこれをおしつぶすとしても、そのとき人間は、人間を殺すこのものよりも、崇高であろう。なぜなら人間は、自分の死ぬことを、それから宇宙の自分よりずっとたちまざっていることを知っているからである。宇宙は何も知らない」

というこの知るということの崇高さと同じである。

●● 質問7 「三つの願い」 ●●

「神との対話」は著者のニールがふんだりけつたり的人生に深夜怒りが爆発。紙片に「神も仏もあるものか!」と書きなぐったところ、自動書記で手が勝手に動き出し神の言葉が書かれた。そこから神との対話が始まり、結局10冊近くの本となり、世界中で翻訳された。

ここで、学ぶべきことはふたつ。とてつもない感情があること。紙片とはいえ、実際に手を使って書いたということである。

先日お薦めしたノートは作られたらどうか。

そのノートは神棚、仏壇以上の魔法のノートである。最も大きなものと通じる魔法の鏡である。今日は気づきだけでなく、ぜひ、あなたの望みを書いていただきたい。

アメリカのテレビドラマ「Xファイル シーズン7 第21話 三つの願い」に願いをかなえてくれる魔女の話がある。もし、魔女が三つの願いをかなえてくれるとしたら、あなたは何を願うだろうか。

(1) 高塚の願い

私はお金が欲しい。

お金があったら、ずっと旅行をしています。

そして、その土地で出会った人々と「気・人間・宇宙」について語ります。

病気の人がいれば手をかざします。

お相手がいれば将棋も指したいですね。

夜は星の見えるところで瞑想します。

寝る前には地酒の日本酒を二合飲んで眠りにつきます。

三つのうちの残り二つはおそらく使わないで、死んでいくと思います。

・・・ただし、これは20年前の願いです。いまは少し違います。最後に書きます・・・

(2) 魔女の願い

ところで、モルダー(Xファイルの主人公でFBI捜査官)は捜査の過程で魔女に出会い、彼女から三つの願いをかなえてくれる約束をされます。モルダーはしばし考え、魔女にたずねます。

「もし君だったら何を願う？ 参考にしたい」

魔女(炎の魔神ジーニーから願いを叶えられる能力を与えられた女性)

「そうね
何も願わない人生
一瞬一瞬を大切にしたいわ
無いものねだりをせず――
ありのままを
カフェオレを飲みながら――
静かな時間を」

と答えます。そして、モルダーは願いを語ります。

「戦争のない平和な世界を」

すると、世界から人類は消え、モルダーだけになります。あわてて、モルダーは二つ目の願いをします。

「今の願いを取り消して、もとに戻してくれ」

残りはあとひとつ。しばし考え、モルダーは三つめの願いを言います。

「ジーニー、あなたの願いがかなうように」

そして、魔女ジーニーは普通の人になり、カフェオレを飲みながら静かな時間を過ごすのです。

三つの願いをかなえてあげられるこの女性は、元は人間だったということです。しかし、炎の魔神ジーニーに三つの願いをかなえてもらって、今は、500年を越す長寿と願いをかなえてあげられるパワーが与えられています。しかし彼女によると、人間は

とても愚かな願いばかりを頼んでくるということです。

もし、あなたがすべての病気を一瞬にして治してしまう能力、すべての願いを一瞬にしてかなえてしまう能力が与えられたとしたら、あなたはどのような人間と出会い、どのような人生を送るのでしょうか。

すべての人に無私のところで対するならば、能力があるあなたは常に求められるだけの存在です。バカバカしい欲望にいつもつきあわされるだけです。

それとも、あなたのお眼鏡にかなった願いだけをかなえてあげるのでしょうか？

そうするにしても、もっともな願いというのは果たして存在するのでしょうか？

どうもこの人間世界では、お願いばかりをされる神社の神様として存在するよりも、普通の人間として存在することの方が有意義な人生が送れるようです。

(3) 無限の願い

喜国(きくに)雅彦の「傷だらけの天使たち」(小学館文庫)という4コマ漫画にこういう話があります。

著者「キクニ」が昔「蝶」を助けたことがあって、その蝶の精がキクニを訪れて「お礼に願い事をかなえてあげます」と申し出ます。キクニは時々登場するのですが、傲慢でマヌケなキャラクターとして出てきます。ここでも、ふんぞり返って、「では、百の願いをかなえることをかなえてくれ」と言います。蝶の精はびっくりしますが、汗をかきながら願いをひとつずつかなえてあげます。そして、残りあと1個になったところで、またキクニが「では、百の願いがかなうことをかなえてくれ」と言って終わりになる、ギャグ漫画です。

願いを三つでなく、無限に求めることは人間の世界では欲深いことと嘲笑されます。しかし、本当にそうなのでしょうか。もし、あなたにこどもがいれば、こどもに出来る限りの願いをかなえてあげようと思うのではないのでしょうか。

そして、おそらくはもうこどもではないではないあなたもまた、無限とも思える願いをかなえてもらってこの世に生きているのではないのでしょうか。年末ジャンボは当たらなくとも、今日体を思うように動かせるということは、願いをかなえてもらって生きているのではないのでしょうか。このことが分かったのは、母の死を見たときでした。ほんの30分前まで声をかわしていた母がその30分後には動かなくなる。これ

はまさに、

「生命が引き上げられた」

のです。体は弱っていたのですが、生物学上の肉体が生きることができなくなって死んだとはとうてい思えない。母はもう生きなくともいい、と思った瞬間、しかもそれが最善の選択であるとき、生命は引き上げられたのです。それは、今日明日死ぬことなど考えられないことであるどのような健康な人にとっても同じです。

もし生きる願いも死ぬ願いもかなうなら、この世の無限大の数の願いもかなえられると言えるのではないのでしょうか。

・・・・・・以下、次回に続きます。願いがかなう法について考えます・・・・・・

南のレポートへの感想

久しぶりに見た南らしい勢いのある文章でした。
ただ、話題を詰めこみ過ぎたきらいがあるのではないか・・・

この内容、この書き方であれば、論文調より、話題をしぼりこんで、散文詩のようなものを目指した方がよいのではないかと思いました。

また、全身脳の話を書くのであれば、腰痛でのウォーキングの体験を書く方が説得力があるように思えますが・・・

あと、推敲はしたのでしょうか・・・推敲して、この文章であれば、それはそれです
ごいことだと思いますが・・・

渡部のレジュメへの感想

大分類は、二つか三つかというのが相場というものではないでしょうか。世界(地球)と公共圏(社会・世の中)はひとつにしてもいいように思えます。文化人類学の立場から分けたくなるのは理解できますが。

ご存知かもしれませんが、カール・ポパーの分類をご参考までに(おそらく最初に考えたのはゲーテではないかと思われませんが)。世界を三つに分けています。

世界Ⅰ～物質界

世界Ⅱ～個人の精神世界

世界Ⅲ～図書館に代表される人類知の世界

自分の世界観とは違いますが、世界についての分け方として簡明で考えさせるものがあります。

.....

二人の話しで共通しているところは、知識の話しなので、知識をテーマにして共通のレポートとするのもいいかも・・・

「次世代の人類へ——あなたがあなたを預言するための手引き」(3)

2020年4月27日 高塚恒夫

(4) <錬金術師>～「願望成就の法」

生きたいという思いは常になえられているが、絶対ではない。ほとんどの人はもっと生きたいと思うが、それでも死ぬ。なぜか。

昔いこの高塚光氏から聞いた話しである。彼にスプーン曲げを教えてくださいました方がいてその方の話しである。その方は、「サインペンで自分の名前を書いた百円玉」を見ている目の前で消して紙のコースターの間に入れてしまうという。百円玉のテレポーションである。それも驚きであるが、それよりはるかに驚いたことがある。それはその方がそのテレポーションをできるようになるために、10年間か15年間か忘れたが毎日試みたことである。

“実現するかしないか分からないこと”を実現するまで試みたのである。死なない人はいないというが、もしあなたが毎日死なないで生きていくということを願えば、その願いはかならずや実現するであろう(もし実現しなかったら、それはおそらく“実現以上のこと”が実現したということであると思っている)。

日本人の平均余命はおよそ男性80歳、女性90歳である。平均して85歳であるとして、生死について考え始める年齢を仮に15歳としたら、それから70年間何らかの形で生死について考える機会がある。70年間はおよそ25500日あるが、このうち何日間「生きたい」と思って生きてきたらだろうか。難病であったり、医師から死を宣告でもされたりしない限り、100日間も思わないであろう。いや、10日間も思わないかもしれない。葬儀に参列する機会があっても、他人事と思っている。自分が火葬場の釜のなかにはいることなど誰もイメージしないであろう。生きていることも当たり前だし、死ぬことも当たり前なので、・・・わたしの言葉でいえば、

<生きることも死ぬこともわたしのものだと思っている>

ので、それをあらためて願ったりはしないのである。
だが、

<願って生きることもできるし、願って死ぬこともできるのである>。

なお、身体使用の問題は、別枠であらためて取り上げる。ここではただ、願いは続けることによってかなうのではないかということを示唆するだけである。

これを読まれているほとんどの方は、百円玉のテレポも生きることも死ぬことも望んでいないであろう。いくら不老不死(正しくは肉体の正しい使用ということであるが)がかなうからといって、あるいは10億円宝くじが当たるからといって一年間願い続けることはできないであろう。貴重な一年間をそんなことに使いたいとは思わないはずだ。

・・・ということで、ここでまた<質問>である・・・

●● 質問8 「あなた自身の行為」 ●●

あなたは貴重なこの一年間を何のために使い続けたいか。

.....

そう、今年の抱負と同じようなものである。初詣の神様への願いと同じようなものである。ただ大きな違いがある。それは、神様にお願いをお任せするのでなく、

<<あなた自身が>、続けることは何か>

ということである。

この続けるというのは一週間のことではないし、一日のことではないし、一分間のことでもない。一年間のことである。そして繰り返しになるが、<あなた自身が>することである。するのは神様ではない。それでは、願いではないではないかと言われるかもしれない。

だが、考えてもらいたい。もし願い事をするのであれば、それは一年に一回神社に行ってお賽銭を投げて手を合わせ、自分は他のことをしている・・・そんな願いであれば、それは、<願う>ことではないであろう。願うのであれば、その願いに照応して自分自身もまた行動する、これこそ願いではないか。その意味で、

<あなたがこの一年間することがあなたの願いなのである>。

あなたのこの一年の願いは何であったのだろうか。

もし何ものもなかったなら、いまというこの時に願いを立て、いまというこの時から新しい一年の願いを生きていけばよい。

そんなものは分からないというかもしれない。しかし、願いは生ずるし、願いを生きるし、願いは実現する。(要加筆)

(5) 高塚の願い

20年前の私の願いです。

私はお金が欲しい。

お金があったら、ずっと旅行をしています。

そして、その土地で出会った人々と「気・人間・宇宙」について語ります。

病気の人がいれば手をかざします。

お相手がいれば将棋も指したいですね。

夜は星の見えるところで瞑想します。

寝る前には地酒の日本酒を二合飲んで眠りにつきます。

三つのうちの残り二つはおそらく使わないで、死んでいくと思います。

誰でもそうであるように、願いは形を変えていきます。35年前すでに社会人でしたが、医者になりたいと思って受験勉強をやり始めると、父が亡くなり、その臨終に際して“世界”は従兄弟の光さんと引き合わせてくれて、気功治療をやるようになります。そう、世界は私の願いに対して、こう言ったのです。

「おまえがなるのは医者ではないだろう」

そして、同じ道の、もっとありがたい道に誘(いざな)ってくれたのです。願いが自分の本望であれば、その本望はもっと大きな形で実現されるのです。

ですから、高塚の願いである「日々旅を過ごして生きていきたい」という願いもまた、20年経つうちに形を変え、もっと大きな願いとなっています。それは、

<<時空の旅人>>として生きていく>

ということです。日本国内ではなく、あるいは地球上ではなく、この宇宙全体、あるいは次元の異なるいくつもの宇宙を生きていくということです。そして、

<いまもそうやって生きていく>

ということです。

どういうことかという、いまでもその願いを生きることはできるということです。あるいは、その願いをかなえるための準備はいまでもできるし、本当に願うのであれば、それはいますべきことではないかということです。

<いまできることの延長に未来の願いはあるのです>。

<そして、そのいまできることをすれば、未来は願いではなく現実です>。

ピース・ピルグリムという方がいらっしゃいました。現代の遊行者とでもいう方で、バックパックひとつ持つわけでもなく、「ピース・ピルグリム」(＝平和の巡礼者)と書かれたパーカーひとつを着てヒッチハイクしながら全米を何度も横断された方です。ポケットには歯ブラシとハンカチだけを入れ、その日の食事と宿を提供して下さる方に出会うまで、ひたすら歩き続け、平和について人々と語り合った方です。この方がこの遊行の旅を始めると決め、“実際に”旅を始めるまで15年の歳月がかかっています。準備が必要であったのです。どういう準備かという、 “常に至高体験とともにいる” という準備です。この至高体験は彼女にとっては、常に神とともにいるということでした。これが成し遂げられた時点で彼女は現実の旅に出るのです。

しかし、どうなのでしょう。準備の15年間も彼女は足踏みしながらもピース・ピルグリムとして遊行の旅に出かけていたのではないのでしょうか。

思い立ってからずっと平和の巡礼の旅に出ていたのではないのでしょうか。

自分はそう思っています。見える旅だけが旅ではないのです。

ですから、わたしも旅行をするお金がなくとも、内界、外界の時空を旅する宇宙船がなくとも、いま旅することはできるのです。この世界では準備というのでしょうか、準備ではなく旅なのです。1ミリでも1万分の1ミリでも歩めばそれは旅なのです。その旅を15年間のピース・ピルグリムのようにしていまわたしはしているのです。

書齋や行き付けの喫茶店で気を送り、リアルで会うことがなくネットで話しかけても

<それは、わたしの、いまの、時空への旅なのです>。

<わたしは、いま現在、時空の旅人なのです>。

(6) わたしの宇宙船

相手が救われない人間だと思えば、地獄に落ちればいいのか、死刑にすればいいのか
思うかもしれない。

自分にはこんな人生を続けていくしかないと思えば、残り数十年、鉛色の仕事とお酒
とネットに人生をついやすかもしれない。

しかし、アメリカ大統領の力、中近東大富豪の富、マザー・テレサの慈悲、それらよ
りずっと大きなものを持っていると知ることができたなら、感じとることができた
なら、あなたの思うこと、あなたの願いはまるで違うものになるであろう。

わたしは宇宙船である。外界と内界を飛び回る宇宙船である。

この宇宙船には死刑台もないし、攻撃の武器も防御の武器もない。

あるのは、<これがわたしである>という動詞の自己規定だけである。これがこの宇
宙船のエンジンである。

この自己規定に照応して外界と内界があらわれ、旅することができる。

だから、小さな望みを抱かないし、小さな自己規定もしない。

内と外の新たな体験、新たな気づき、新たな視点、これを友として、ほんの皮一枚前
に進んでいくこと、あるいは後ろに退いていくこと、あるいはまた、ふくらんでいく
こと、縮んでいくこと、これがわたしの旅である。

さらなる友もある。それは<親切>と<懸命>さである。いまのわたしの動力はそれ
だけである。

そういう宇宙船である。

そういう時空の旅人である。

(7) 願いと創造

神がいて神が言ったのか、宇宙人がいて宇宙人が言ったのか、それは分からない。どちらでもいい。宝くじが当たればいいなどと考えている高塚の耳に痛い言葉であるからだ。

「求めるものをつねに得られるとは限らないが、自分が創造するものはつねに得られる。創造は思考に従い、思考は見方に従う。」

(「神との対話 3 巻」 150 ページ・文庫本版 194 ページ)

(8) 「行為の的」 <行為への愛><動詞><時空>

>「求めるものをつねに得られるとは限らないが、自分が創造するものはつねに得られる。」

わたしにとってこれには二重の意味がある。ひとつは、文字通りの、求めるだけでは、こころで願うだけではつねに手にすることができるとは限らないが、求めるものをあなたが創造するのであれば、体を使ってつくり出すのであればそれを手にすることができる、という意味である。

そして、この「創造するものはつねに得られる」という、「創造するもの」というのは、創造する「もの」だけでなく(すなわち創造行為の“結果”でなく)、「創造行為そのもの」のことをもいっているのである。これが二番目の意味である。

<創造行為のその行為自体は常に行為する人のものである>。

<創造行為のその行為自体がその人なのである>。

グルジェフは舞踏公演が終了すると、皆で苦勞して作った大道具、小道具をすぐにその場で壊させたという。舞踏は一回性であり、幕を閉じれば用はないといっても、ただちに壊してしまうというのは師のグルジェフの指示がなければとてもできなかったであろう。

これはまだ舞台装置であるから理解もできる。しかし、どこで見たのか忘れてしまっていたが、ある画家の個展を見に行ったとき、この絵は個展終了後にすべて処分すると書かれていたのには正直驚いた。普通は永遠なるものを絵画のうちにこめようとして描くものを、絵画もまた一回性であるというわけだ。いや、もしかしたら、処分するという告知もまた芸術なのかもしれない。内なる発心があり、芸術行為があり、作品にあらわされ、人に見てもらい、灰に帰する、この一連の行為が芸術であるというこ

とだ。わたしであるということだ。結果としての作品だけを残すというのは、この作者にはあってはならないことなのであろう。

オイゲン・ヘリゲルは東北帝国大学に哲学とラテン語を教えるためにドイツから来日する。せつかく日本に来たのだから東洋的な習い事をしたいということで、和弓を習い始めるが、来る日も来る日も習うのは弓を射る型の練習ばかりである。いろいろ質問を投げかけるのだが、師は西洋人が満足するような話しをしてくれるわけではなく、ただ修行に励めという。そんなある日、

私が一射すると、師範は丁重にお辞儀をして稽古を中断させた。私が面食らって彼をまじまじと見ていると、「今しがた“それ”が射ました」と彼は叫んだのであった。やっと彼のいう意味がのみ込めた時、私は急にこみ上げてくる嬉しさを抑えることができなかった。

「私がいったことは」と師範はたしなめた、「讃辞ではなくて断定に過ぎんです。それはあなたに関係があってはならぬものです。またあなたに向かってお辞儀したのでもありません。というのはあなたはこの射には全く責任がないからです。この射であなたは完全に自己を忘れ、無心になって一杯に引き絞り、満を持していました。その時射は熟した果物のようにあなたから落ちたのです。さあ何でもなかったように稽古を続けなさい。」かなりの時が経ってからようやく、時々また正しい射ができるようになった。それを師範は無言のまま丁重にお辞儀をして顕彰するのであった。正しい射が私の作為なしにひとりでのように放たれるということが、どうして起るのか、どうして、私のほとんど閉じられた右手が突然に開いて跳ね返るようになるのか。私はその当ても、また今日でもこれを説明することができない。ただそういうことが起ったという事実は確かである。そしてこのことだけが大切なのである。

(オイゲン・ヘリゲル著「弓と禅」93ページ 福村出版)

オイゲン・ヘリゲルは的に当てたのではない。射の型をただけである。その型が最高の舞踏であり、最高の絵画であった。それだけである。その舞踏が観客の賛辞を受けるかどうかは分からない。その絵画が批評家の評価を得るかどうかは分からない。同様に、その射によって矢がまる的に当たるかどうかは分からない。そんな結果を超えて、

< “それ” が射ることがある >

“それ”が舞うことがある。“それ”が描くことがある。この行為こそが願いや目的や結果を超えているものなのである。そして、この行為は「つねに得られる創造するもの」なのである

だから、弓の師はヘリゲルに「弓の的とは何ですか」ときかれたときに「“あえて”こたえるなら、それは仏陀である」と言ったのである。的は戦場における人ではないし、狩りにおける動物でもないし、弓道場でのまるい的でもないのである。それは、一回、一回の仏陀なのである。仏陀は狙うものではないし、矢を当てるものでもないし、また当たるものでもない。的は仏陀と言ったが、それは射の行為なのである。

<仏陀は目指すべき的ではなく、仏陀は行為なのである>。

シッダールタが臨終の席で弟子たちに「修行を怠りなく」と言ったように、仏陀は到達点でなく、結果でなく、今現在の行為なのである。

弓を射るときには常に仏陀であるように、踊る時、絵筆をとる時には常に芸術の女神ミューズであるように、そのようにしてわたしの動詞が変容する、その動詞の変容行為が創造なのである。わたし自身の創造なのである。

だから、矢が的に当たるかどうかは二の次の問題である、作品が称賛を浴びるかどうかもどうでもいいことなのである。

見る人は矢が当たった時に仏陀を見るのでなく、永遠に置かれる美術館の作品にミューズを見るのでない。結果を通じて行為の片鱗を見ているだけである。

この弓道の修行の影響が大きかったのであろう。晩年のオイゲン・ヘリゲルは著作の原稿をすべて焼却する。著作が駄作だから焼却したのではない。結果には意味がないと思って焼き尽くしたのである。

では、ヘリゲルの著作はもう手にすることができないのであろうか。

もちろん、著作は手にすることができない。しかし、ヘリゲルの行為そのものは手にすることはできるのである。

どうやってか。

あなたの自身のヘリゲルの道を通してである。

ヘリゲルが師の道を通して、仏陀の射を手にしたようにである。

あらゆる行為はこの世界に積み上げられていて、誰でもその行為の道を通ることができる。

これはある意味、ネット上の情報と同じである。誰でも手にすることができる。違いは、クリックひとつでそこに達することができる指によってではないということである。手と足を使い、体をよじらせ、場合によっては、その手足を何十年も使いつづけて悩んで達する<知識>としての道である。

その道がいつまでも変わらぬ<わたし>であり、時空の旅の航路である。

(9) 実現できない願い

幸せになってもらいたいと願って、相手を愛するというのは、最大の願いかもしれない。だが、その愛の願いですら実現できないことがある。それは、「相手が何をするか」という選択である。すなわち、相手の自由である。こればかりは、愛の願いのおよばぬところである。だから、どれほど愛しても、他者に対してできることは、相手を思いやり親切にする、ここまでなのである。

以下は、グルジェフが語ったことである。

「愛が恐るべき一面をもっていることの一つは、相手がある程度助けることはできても、その人のために実際に何かを「する」ことはできないということである。「ある人が歩かなければならないときに、その人が転んだなら、起こしてあげることはできる。だが、その人にとっては、もう一步踏み出すことが空気以上に必要であっても、その一步は、その人が一人で踏み出さなければならぬ。その人に替わって、もう一人の人が、その一步を踏み出すことは不可能である。」

(フリッツ・ピーターズ著「魁偉の残像」めるくまーる社 261 ページ)

.....

再度の質問です。

●●<質問> 2-1 ●●

「あなたは何であるか」

●●<質問> 2-2 ●●

「あなたは何になりたいか」

これまで気功教室や個人レッスンで多くの方にこの質問を投げかけてきました。気功教室も個人レッスンも「自分自身が原因となる」「自分自身が行為の理由となる」という意味での<自由>を獲得するための教室であり、レッスンですから、この質問は基本中の基本の質問です。そして、なりたいものになるためのアドバイスを差し上げています。しかし、この「あなたは何になりたいか」の答えで、空前絶後と思われる答えは、初めてお越しになられた四十代の女性の方で、

「教祖になりたい」！！

一瞬絶句しましたが、この驚天動地の答えもその方のご職業をあらかじめの雑談の中で知っていたので、なるほどという答えでした。その方のご職業というのは高齢者の施設で働かれている介護師さんであったからです。その方が教祖ということで何を目指されているのかは分かりませんが、人のあとから歩いていくのが教祖であるなら、これほどぴったりの質問と答えはないともいえるからです。「UFO問題」の話していくと、最後にUFOに乗る人、あるいは地球に残る人、これが教祖だからです。そう、

<この女性はなりたいものにすでになっていたのです>。

少なくともなりたいものになる道を今現在歩んでいたのです。ですから、「あなたは何であるか」の答えを何と答えたか忘れてしまいましたが、はっきりしています。この女性はこう答えるべきだし、こう答える資格があります。

「わたしは教祖である」

ということです。「あなたは何であるか」の答えは往々にして「何になりたいか」の答えにふくまれているものです。なぜなら、

<なりたものについて語っているのはいまのわたしだからです>。

もうおひとりの答えも典型例ともいえる話しです。

「わたしは癒す人になりたい。ただ、今は体調がすぐれないので癒されたい人になりたい」

条件付き願望、条件付き自己実現である。これは往々にして“条件実現”で人生が振り回されて終わってしまう。この場合、癒されることを求めるだけで人生が終わってしまう。もし、癒す人になりたいのであれば、体調がすぐれない今この瞬間から癒す人になることであり、そのことは今この瞬間からできることである。これは癒しから世界平和まで同じである。

今この瞬間から実現できるまで続ければ実現することである。

そして、これまたよくあることだが、癒す人になったとたんに癒されるものなのである。

教祖にしろ癒しにしろ、どちらも今現在の自分自身に内包されているのである。

●● 質問9「荷物」～<モノ・所有><名詞と動詞><錬金術師> ●●

今日バックパックに入れる荷物は最小限とする。

今日予定に入れるやるべきことは最小限とする。

そして、今日手に持ったものは必ず使い、今日しようと思ったことは必ず行なう。

最小限のすべてを使い、最小限のすべてを行なう。

一日の終わりには、すべてを使い切り、ただひとにぎりの灰だけが残っているように。

今日のあなたが携えている荷物は何だろうか。

今日のあなたがしようと思っていることは何だろうか。

(1) 高塚のある一日

2014年9月12日の名詞(荷物)～衣服・めがね・財布・ハンカチ・ちり紙・パソコン・スマホ・本「モオツァルト・無常という事」「非線形科学」

2014年9月12日の動詞(しようと思っていること)～原稿整理・気の練成

2020年2月15日の名詞(荷物)～上記とほぼ同じ・・・本だけ違って「アルクトゥルス人より地球人へ」「ハトホルの書」・・・レポートに清書しなければならない下書きのメモ

2020年2月15日の動詞(しようと思っていること)～日記・レポート「次世代の

人類へ」(=原稿)の執筆・遠隔治療・地球瞑想

(2) 時空の旅人

あなたは時空の旅人である。

今日一日、カバンの中に入れ、“一日間運んだ”だけで使わなかったものは何か。
この一年間、押し入れに入れ、“一年間運んだ”だけで使わなかったものは何か。
この十年間、押し入れに入れ、“十年間運んだ”だけで使わなかったものは何か。

使わなかったもの、使うことがないもの、これらを運ぶことをいつやめるのか。

そして、あなたは時空の旅人として、何を携えて旅をするのか。

今日一日であれ、一生の間と呼ばれる時間であれ、あるいは、次回の人生、次々回の人生までつらなる何百年、何千年、何万年の時間で、何を携えるのか。

いま携えているものが、あなたが何者であるかを語っている。
そして、あなたが何者になろうとしているのかを語っている。

(3) 賞味期限<自己規定>

ものにも賞味期限がある。カビの生えた食べ物が食べられないように、あなたの持っているものにも賞味期限がある。賞味期限を過ぎたものは使うことができない。いっそのこと、ものが入っている段ボール箱に賞味期限を記入するのもよいかもしれない。捨てられないものに賞味期限を書き、期限がきたら中身を開かずに処分してしまおう。

もしこの案が採用されるなら、賞味期限を決めるのはあなただ。
賞味期限を書くのもあなただし、
期限が来たら手放すというその約束を守るのもあなただ。
あるいは、期限がくる前に使うという未来の約束を守るのもあなただ。
すべてあなただ。

あなたはあなたを決め、その決めたことを行為に移せばその行為はあなたになる。

(4) 今日までという賞味期限<時空>

今日現れ、今日までの賞味期限のものがある。
この一瞬に現れ、この一瞬だけの賞味期限のものがある。

以前、築地の癌センターに気功治療に行くとき、案内役のご家族の方が路上でひっくり返っていた自転車を何気なく起こしてあげているのを見て、えらく感心した。それまで自分はそんなことをしたことがなかったからだ。それからは自分も見習って倒れている自転車を見つけた時はかならず起こしてあげるようにしている。昔はひっくり返したのは自分ではないと思っていたから、起こすことはしなかった。でもいまは、

倒したのはわたしでなくとも、起こしてあげるのはわたしだ。
なぜなら、倒れている自転車を見たからだ。
見た以上、倒れている自転車を起こしてあげるのはわたしなのである。

この自転車はわたしのものではない。
この自転車を倒したのもわたしではない。
しかし、わたしはこの自転車を起こすという行為をすることはできる。
この行為はわたしのものであり、この行為はわたしなのである。

わたしは、わたし——起こすという行為——を助けるのか。
あるいは、わたし——起こすという行為——を見殺しにするのか。

どちらにせよ、それをするのは、倒れている自転車を見たこの一瞬だけである。
だから、その一瞬だけしか自転車を起こすことはできない。

この一瞬だけ使える手と足がある。
その手と足の賞味期限はこの一瞬である。
それは特別な時間でなく、日常茶飯事にある“時と場”だ。

(4) 不安という衣服

使うことによって生じることがある。
それがこの世のわたしの人生だ。

しかしまた、手放すことによって生じることもある。
それもまたこの世のわたしの人生だ。

どういう人生かという、裸になるということだ。

捨てたら困るという不安を脱ぎ捨てて裸で立つということだ。

それはとてつもなく難しいことであり、しかし、手放してしまえば意外と容易であると気づく、不思議な変容である。

物質が主体のこの世界で、その物質は“ある一面でしかない”と知る、不思議な変容である。

(5) 一生もの

あるいは、まるで別の話しとしてこういうことも言える。

生まれてからずっと持ち続けているだけで、使っていないものはないだろうか。

それは生まれる前からわたしのものであったものだ。

それこそが、生まれる前から携え、これからもずっとわたしが携えていく“もの”であり、

その“もの”とは、この世界で使うべき<わたし>であり、

この世界で育てていく<わたし>であるかもしれない。

.....

この“もの”とは、わたしがこの人生で何をするかという“すること”である。

わたしとは、肉体の“もの”でなく、行為の“すること”である。

“すること”をわたしの奥深くにしまったままにしているのではないだろうか。

生まれる前にはしっかり覚えていたのに、この人生ではすっかり忘れてしまっているのではないだろうか。

わたしは、何をするのだろうか。

わたしは、何になりたいのだろうか。

そして、わたしは、何者なのだろうか。

(6) <錬金術師> 202 ~ 「灰」 <反復> <動詞>

書齋にはスリッパが4組ある。亡くなった母の家から持ってきたものである。そのうちのひとつは書齋に引っ越してから3年間使い続けているので、ボロボロである。薄手の夏用のスリッパであり、洗濯機で洗っているのに余計にボロボロである。なぜそこまでして使い続けているのかというと、ひとつには使えるスリッパをずいぶん捨ててきたからである。その供養の代わりという思いがある。あとはやはり使っていると自分の分身ようになってしまうからである。他の3組のスリッパとは別の存在なのである。

よくものを生かすというが、生かすとは、ボロボロになるまで使い切ることである。スリッパはボロボロになって死んでしまった時に、初めて生命が付与され、次にものとなって、あるいは生物と呼ばれるものになって生まれ変わるのではないだろうか。

だから、もしかすると、生命付与とは灰にすることなのかもしれない。手にするひとつひとつを使い切って灰にすることなのかもしれない。

無限回の使用、無限回の日常、一回一回は、ひとつひとつは、無意味であり、ささいなことであっても、それが無限に積み重ねられるとまるで別のものになる。

なぜか。

きっと使用されるどのようなものにも生命が宿るからである。
きっと使用されるどのような行為にも生命があるからである。

賽の河原の石積みも、もしかしたら、いつか鬼の行為を変えてしまう石積みとなるかもしれない。

灰とはこの無限の石積みの行為のようなものである。

石が灰になるまで、石が擦り切れるまで、石積みを繰り返すように、ただただ<わたしの行為>を繰り返すことである。

(7) 行為への愛～祖父の読経・黒住宗忠・賽の河原の石積み

・・・行為の結果がまるで異なるものになること・・・発話、言葉の問題
一回読むだけでは、分らない文章、意味のない文章

では、アルクトゥルス人のホログラフィックな情報の伝え方とは何か。

逆にまた、何度も何度も見ているとやせ細ってしまうものもある。月から見た地球の写真のように・・・

母方の祖父は土建業をやっていて酒好きではあったが、温厚な人間であった。今でいうホームレスを酔った勢いで連れて来て、よく泊めていたという。だからというわけではないが、信心深く、物心ついた頃から76歳で亡くなるまで、毎朝毎晩念仏を称え、一か月に一回は半日もかかるようなお経をあげていたという。その間子ども七人はうしろでじっと正座させられるのだから、母はつらかったと生前笑いながら語っていた。

そんな祖父であるが、亡くなる一か月ぐらい前に「自分はもうお経をあげる必要はなくなった」と言い、友人、知人の挨拶まわりをして向こうの世界へ旅立った。

宗派は「南無阿弥陀仏」の浄土真宗であり、念仏は悟りを求めてするのではなく、ただただ南無阿弥陀仏と称え続けるだけなのである。祖父の心境の変化は知るべくもないが、おそらくは阿弥陀如来が祖父に「もうわたしの名は称えなくていい」と言われたのであろう。あるいは、称え続けることによって“別の場”に立ったのかもしれない。どちらにしろ、生半可な話しではない。ただ、その生半可でないものを求めて称名を70年間続けたのではない。ただ、名を称え続けたのである。

仏陀は何度も何度も繰り返され、新たな仏陀となる。

ただし、新たな仏陀を目的にして仏陀は繰り返されるのではない。

そして、新たな仏陀もまた何度も何度も繰り返され、また異なる仏陀となる。

これもまた、異なる仏陀を目的にして新たな仏陀が繰り返されるのではない。

ただ、「それがわたしである」という自己規定のもとに繰り返されるだけであり、繰り返されるようにみえるだけである。

同じ行為をもう一度繰り返す。これは前の行為とは違う。

二度繰り返す。三度繰り返す。これも前の行為とは違う。

だから、百万回繰り返したなら、初めての行為とはまるで別のものが生じるということになるのである。

その繰り返しがその人の存在なのである。

この、永遠に続く行為が仏陀なのである。

灰になるまで使い切ることの無限の連鎖が新たな感情を生じさせ、この感情がわたしを特異点、創発へと導くのかもしれない。

話しはまた飛ぶ。

モノへの生命付与はどのようにして行われるのか。・・・「弓と禅」の矢（この矢は人間技だけによって当てられたものではない）

行為への生命付与はどのようにして行われるのか。・・・ブッダの行為・イエスの行為

() 行為への愛としてのヒーリング

2月20日2020年

● 「内なる風景・外なる景色」905～「補足」「アルクトゥルス人より地球人へ」57<ヒーリング>

昨日の話しの補足です・・・ただ、茫漠とした話しで、補足になっているのかさえ分かりません。

気功治療は誰かに教えてもらったわけではなく、従兄弟の光さんにスプーン曲げを教えてもらい、その数か月後に手をかざしたら病気が治ったということで、あとは手探りで進んできて（見えざる存在に導かれてきてという側面もおおいにあります）、それから30年後の今に至っているというのが実情です。ですから、そのあたりを加味していただき、曖昧模糊とした点をご容赦いただきたいと思います。はっきり言って、気功治療は分からないことだらけです。しかも遠隔治療であればなおさらです。しかし、アジュロンさんの言っている

「私の意図と、回転する光の場である私の光の繊維（フィラメント）を融合する」が3次元の地球人にも応用できるとしたら、それは私の場合、遠隔治療にあたると思っています。

私の遠隔治療ではっきり分かっている点は、

「わたしの思いで遠くは離れた患者さんの所に“気ができる”」ということがあります。気ができたのはわたしがわたしの思いで“つくった”のか、わたしの思いに“照応して”ご先祖様がつくってくれたのか、神仏がつくってくれたのか、あるいは宇宙人がつくってくれたのか、はたまた未来のわたしがつくってくれたのか、いろいろ思うことはできるのですが、正直分かりません。

ただ、アジュロンさんの話しを読み、そんなこと考えもしなかったことですが、もしかしたら“体”がつくっているのかもしれないとも思い始めたのです。「身体は神の社（やしろ）である」という話しがあります。アルクトゥルス人は神を否定していますが、これはおそらくキリスト教的な神のことでしょう。ハトホルの言うように、神を変容のプロセスととらえるなら、これはわたしの“体”にもあてはまることです。変容については卵子と精子の二つの細胞から生じた体が母親からこの世界に生じ、成長し、やがて動かなくなるという変容しか目にするにはできないのですが、もっと他の変容の可能性もあるのではないかということです。

これまでは、「わたしが気のことを思うと患者さんの所に“気ができた”」と思っていたのですが、もしかしたら、気のことを思うとわたしの身体の気変じているのかもしれないかもしれません。突拍子もないことを言いますが、身体の気は時空を超えているところが

あり、わたしが患者さんの所につくった気はもしかしたらわたしの身体が変化しただけのものなのかもしれないということです。

自分は気を“つくった”のかどうかということにはとても微妙な感覚があります。というのは、自分にとってベストの気というのは、これは自分がつくったというより「この気に自分が導かれている」のではないかという感覚があるからです。まあ、自分がつくった気としては出来過ぎだということです。ですから他の可能性、ご先祖様や神仏、宇宙人、未来のわたし、体、などいろいろなことを思うのです。

(たぶん、明日に続きます)

(2020年2月21日朝 千葉新検見川の「マロンド」にて)

2月20日2020年

●「内なる風景・外なる景色」905～「補足」「アルクトゥルス人より地球人へ」57<ヒーリング>

昨日の話しの補足です・・・ただ、茫漠とした話しで、補足になっているのかさえ分かりません。

気功治療は誰かに教えてもらったわけではなく、従兄弟の光さんにスプーン曲げを教えてもらい、その数か月後に手をかざしたら病気が治ったということで、あとは手探りで進んできて(見えざる存在に導かれてきてという側面もおおいにあります)、それから30年後の今に至っているというのが実情です。ですから、そのあたりを加味していただき、曖昧模糊とした点をご容赦いただきたいと思います。はっきり言って、気功治療は分からないことだらけです。しかも遠隔治療であればなおさらです。しかし、アジュロンさんの言っている

「私の意図と、回転する光の場である私の光の繊維(フィラメント)を融合する」が3次元の地球人にも応用できるとしたら、それは私の場合、遠隔治療にあたると思っています。

私の遠隔治療ではっきり分かっている点は、

「わたしの思いで遠くは離れた患者さんの所に“気ができる”」ということがあります。気ができたのはわたしがわたしの思いで“つくった”のか、わたしの思いに“照応して”ご先祖様がつくってくれたのか、神仏がつくってくれたのか、あるいは宇宙人がつくってくれたのか、はたまた未来のわたしがつくってくれたのか、いろいろ思うことはできるのですが、正直分かりません。

ただ、アジュロンさんの話しを読み、そんなこと考えもしなかったことですが、もしかしたら“体”がつくっているのかもしれないとも思い始めたのです。「身体は神の社(やしろ)である」という話しがあります。アルクトゥルス人は神を否定していますが、これはおそらくキリスト教的な神のことでしょう。ハトホルの言うように、神

を変容のプロセスととらえるなら、これはわたしの“体”にもあてはまることです。変容については卵子と精子の二つの細胞から生じた体が母親からこの世界に生じ、成長し、やがて動かなくなるという変容しか目にするにはできないのですが、もっと他の変容の可能性もあるのではないかということです。

これまでは、「わたしが気のことを思うと患者さんの所に“気ができた”」と書いていたのですが、もしかしたら、気のことを思うとわたしの身体の気を変じているのかもしれないかもしれません。突拍子もないことを言いますが、身体の気は時空を超えているところがあり、わたしが患者さんの所につくった気はもしかしたらわたしの身体が変化しただけのものなのかもしれないということです。

自分は気を“つくった”のかどうかということにはとても微妙な感覚があります。というのは、自分にとってベストの気というのは、これは自分がつくったというより「この気に自分が導かれている」のではないかという感覚があるからです。まあ、自分がつくった気としては出来過ぎだということです。ですから他の可能性、ご先祖様や神仏、宇宙人、未来のわたし、体、などいろいろなことを思うのです。

(たぶん、明日に続きます)

(2020年2月21日朝 千葉新検見川の「マロンド」にて)

2月21日2020年

●「内なる風景・外なる景色」906～続「補足」(呼吸)「アルクトゥルス人より地球人へ」58<ヒーリング>

仮にわたしとともにできる気が「私の意図と私の体とが融合したもの」であるとする、その融合はどのようにして行われるのだろうかということになり、これが一昨日書いたことです。そうではないかという程度の話しではありますが。

わたしが気功治療をする時に重要な要素は呼吸です(もうひとつは水ですが、ここではふれません)。通常呼吸は生きている限りしていることですが、気功治療の場合の呼吸は日常の呼吸と少し異なります。それは、

<呼吸を消していくのです>。

生理学的にはゆっくり吐くということになるのですが、自分としては“消していく”というのが一番ぴったりの表現です。あるいは“呼吸を落としていく”ともいえます。この消す過程で気は患者さんのなかに流れていくのです。これがちょっと乱暴な言い方でしたが、一昨日「意図と体の融合は呼吸を止めること」と書いたことです。

しかし、止めるのはあくまでもこの世の3次元の生理学的な呼吸であり、“気の呼吸”はつづいていくと思っています(もしかしたら、これも将来的には止まるのかもしれませんが・・)。なお、気の呼吸というのは一日の終わりに湯船につかるとじわっと

した感覚がありますが、そのような感覚をもちながら体全体で気の出し入れをすることです(ただし、気感覚はもっと微細です)。

この気の呼吸は生理学的な呼吸と照応しながら行われるわけですが、気の呼吸をするようになれば、それは生理学的呼吸とまるで別物であると分かるはず。アルクトゥルス人の瞑想のマスターであるイーストコルオさんは瞑想によって呼吸の静止時間はしだいに長くなっていくとおっしゃっています。数分間とか、何時間とか、です。自分はそのような呼吸停止はできません。あくまでも消していくこと、落としていくことだけで、その状態で呼吸停止としてしばしとどまります。

そのようにして、わたしの場合気はできています。

(2020年2月21日夕方 千葉花見川の「書斎」にて)

2月24日2020年

●「内なる風景・外なる景色」909～「補足」3(思い)「アルクトゥルス人より地球人へ」60<ヒーリング>

とても微妙で難しい問題なのですが、「治そうと思うか思わないか」という問題があります。そういう思いを気と融合させるかどうかという問題があります。

以前関西からおみえになられた、目がほとんど見えなくなった女性の方がいて、その付き添いの男性は友人か恋人のような方でした。わたしが手をかざし始めると、その男性は修験者が持つような長い数珠を取り出し、「治れ！治れ！」と大きな声で叫ぶのです。一瞬びっくりしましたが、「う～ん」といわく言い難い気持ちになりながら手をかざしました。当時は遠隔治療をしていなかったので、それ一回だけでしたが、その場で目が見えるようになったということはなかったと思います。まあ、治らなかったのは色々な要素があり、付き添いの方の強い思いと強い祈りとは無関係と思いますが、少なくともわたしがそのような強い思いをいただきながら手をかざすのであれば、それは間違いであると思っています。

<そのような強さは、呼吸を乱しますし、“思い”をもまた乱すからです>。

呼吸が乱れてはまっすぐな気をつくれません。思いが乱れては沈静した気はつくれません。

気功治療の気は“日常性”がいいのです。

ただし、病気治しの依頼があれば、そこにはどうしても非日常的な思いは生じます。その思いは、

<ある驚きです>。

驚きは、創造の源泉であると自分は思っているのですが、ただその非日常的な驚きも“日常性”をゆがめない上での話しです。

なお、修験者のような方の思いは、わたしの気功治療には禁忌ですが、人目もはばからぬそのような行為を否定するつもりは毛頭ありません。エゴイスティックなおいがしないでもないですが、少なくとも他者をそこまで思う気持ちは尊いものだからです。

ただ、そこまで強さのある思いでなくとも、「治りますように」という思いをいただきながら手かざし、遠隔をすることはどうなのか・・・

(2020年2月24日昼 千葉新検見川の「マロンド」にて)

2月25日2020年

●「内なる風景・外なる景色」910～「補足」4(意識下の力)「アルクトゥルス人より地球人へ」61<ヒーリング>

>ただ、そこまで強さのある思いでなくとも、「治りますように」という思いをいただきながら手かざし、遠隔をすることはどうなのか・・・

行為を意識すると、行為がスムーズにいかなくなるというのは人生で何度も経験があります。

中学一年の音楽の時間、誰も音譜の長さにあわせて縦笛を吹かないので、自分が名指しされ、先生から「高塚君だったら大丈夫だから、みんなよく聴いて」と言われました。確かに自分は音譜の長さによって吹いていましたが、ゆっくり吹こうと意識すると、もちろん「あがった」ということになるのでしようが、いつものようにゆっくり吹けませんでした。それが意識するとできなくなるという初めての経験かもしれません。

高校の体育の時間にもできていた動きができなくなるということも経験がありますし、いまは書くのがワープロなのでそういうことはないのですが、書くことを意識すると、漢字が分からなくなるということも何度あったかわかりません。

身体能力は一度身につけると、それは意識するものではないということです。

自分は車の運転はしませんが、車の運転は“意識下”にある莫大な運転技術の助けなしには決して行うことができないものです(意識だけによる運転は不可能です)。この意識下に意識が働きかけると、運転できないということはないですが、支障をきたす可能性が出てくるということです。これは注意散漫がいいということではなく、あくまでも運転技術そのものに注意を向けるな(意識を向けるな)ということです。

これらは身体能力に関する話しですが、昨日読んだ「東京藝大」にこんな話しが出ていました。もとホストクラブの店長であったという方のお話しです。藝大には社会経験を経てから入学される方が結構いらっしゃるようです。

「絵の具が勝手にやっている仕事を拾っているような感覚になることがあります」
(68 ページ)

笛が勝手に吹いている、鉛筆が勝手に書いている、ハンドルが勝手に運転している、
こうともいえないでもないのですが、これらは一応自分が身につけたものです。しか
し、ここでいっているのは違います。

「これは自分が描いたのではない。絵の具の仕事だ」

といっているのです。中学の時は陸上部に所属していて、部活後も毎晩4キロ環七沿
いを走っていましたが、あるとき友人と走っていて、友人が途中で全力疾走をして50
メートルぐらい走ったのでしょうか・・・自分も全力疾走になるのですが、全力ではな
いのです。全力でなくともついていけるのです。そしてまるで息が上がらないという
不思議な経験をしたことがあります。自分が走ったのは確かなのですが、

「あれは自分が走ったのではない。靴の仕事だ」

ともいえなくはないのです。そして、絵の具の仕事、靴の仕事に“われ”(私の意識)
は入る余地はないのです。いや、入ると彼らの仕事の邪魔をすることになるのです。
「私が描こうとする」「私が走ろうとする」ことによって達成できることではないの
です。

気功治療もまた同じようなところがあると思っています。絵筆を手を取っているよう
に、靴を足にはいているように、わたしの思いが気を手をしているのは十分分かります。
でも、

「これは自分が治したのではない。気の仕事だ」

と思わざるをえないことが時にあります。もちろん、逆もあります！
ですから、いまの自分の気功治療への思いのスタンスは、治そうとは思わないという
ことなのです。ただし、思わなくても思っているのは当然で、ただ、それ以上には思
いをあからさまにしないということです。

(2020年2月25日朝 千葉新検見川の「マロンド」にて)

● 「内なる風景・外なる景色」911～「睡眠」「アルクトゥルス人より地球人へ」
62<ヒーリング>

「神との対話」で、睡眠は体が休むためにあるのではなく、魂が休むためにあるのだ、
という話があります。魂は肉体に入っていることが負担で疲れきり、魂が肉体を離

れることによってリフレッシュされるということです。いまひとつじっくりこない話しですが、昼間一瞬でもこっくりとして意識を失うと(眠りに落ちると)、見違えるようにスッキリとするというのは、眠りによって魂がリフレッシュされたからかもしれません。瞬間休んだからといって、肉体がリフレッシュされるとは考えられないからです。ただ「神対」の話しの本質は置いておいても、確かなことは「意識のブレーカーを落とすと、体はよみがえる」ということはいえます。

前述の「意図と光の繊維の融合」の話しのもとに、アジュロンさんはこんなことを言っています。

「今は地球人を癒す高次元のヒーラーもおり、そのほとんどは就寝中に行われます」
(169 ページ)

気功治療に適した気が生じるのは、治そうという思いがない方がいいというのと同様、患者さんの方でも治ろうとする意識がない睡眠中の方が、気功治療には適しているということです。ですから、自分がお送りする気で多くの方は眠りに落ちるのです。逆に、最悪の状態は患者さんが動いている場合です。あるいはテレビを見たりしている場合です。請われて病院に出張治療に行った時に、昼メロを見ながら気を受けられる患者さんがいましたが、これなど最悪です。

では、真面目に正座して受けるのがよいのかというと、これはこれで好ましいとはいえません。治療家の治癒への強い思いが逆作用として働くように、患者さん側の強い思いもまたストッパーとして働いてしまうからです。ですから、いろいろな意味で睡眠中が一番気が通りやすいのです。

いまどれだけ効いているのだろうかという患者さんが三人いらっしゃいます。このアジュロンさんの話しを読んで、思ったことは睡眠中に送ってみようということです。ですから、数日前から早起きして遠隔で送っているのです。

(2020年2月26日朝 千葉新検見川の「マロンド」にて)

■
誰のためのレポートか・・・未来の自分から現在の自分へのレポートである。
だから、読まねばならないし、だから、完成させなければならない。

■
3億円あったら何に使うか・・・答えはない・・・ケースバイケース・・・アドリブ・・・
ただし、それぞれの答えへの評価に主宰者の“色”がついてしまうであろう。

■ <錬金術師> ~ <身体>

いつも最小限の事を行なうこと。

最小限の事を最大限に行なうこと、無限大と思えるほどに行うこと。
最大限の事を最小限に行うのではなく、最大限の事を最小限に知るのでなく。

なぜなら、使い切ることが生命付与へと通じるからである。

(4月28日2009年掲示板)(10月27日2013年新掲示板)(加筆済み9月12日2014年新掲示板)

ところで、
モノに生命があるとはどのような状態であるか。
モノに生命がないとはどのような状態であるか。

「弓と禅」での二本の矢

わたしが広がること。一体であるということ。

↳遠隔治療では、わたしが広がり、“わたし”が患者さんの中に入るのかもしれない。

弓矢に動いてもらうこと。

あるいは、ダンサー小春の動き、ヨガナンダの動き、・・・もしかしたら、普通の手をあげるといふ行為のなかにも生命はあるのかもしれない。

■ <時空> ~ 吉田弘氏の「大無量寿経」

「手の妙用」の著者吉田弘氏は、荒唐無稽とも思える法蔵菩薩の物語である「大無量寿経」を何百回も読んだという。当初は夢物語のようで、昭和の時代の知識からは読むに値しないと思われたが、親鸞が「教とは大無量寿経是れ也」と言っているので、先入観をすてて書いてあることをそのまま受け取るようにして読んだという。そして、ある日、この世界が光り輝いて見えるようになった。

言葉をただそのまま反芻する。言葉がすり切れるまで読み込む。すると、それが聖なる言葉であれば、そのすり切れた言葉を通じて別世界が開けるのである。

今日一日、ひとつのことを無限大に行うこと。

>聖なる言葉であれば・・・聖なる言葉でなく、反芻することにより、聖なる言葉に

したのかもしれない。

・・・毎日レポートを反芻、推敲し、レポートに生命を注ぎこむこと・・・

■<時空>～「空間」(部屋)

わたしに影響を与えているものとしての部屋。

わたしが影響を与えているものとしての部屋。

どちらにしろ、部屋もまたわたしの表皮である。

(新掲示板記入可)

■「部屋」～<時空><わたし>

部屋はわたしの表皮である。

表皮であるので、この部屋を通じて世界を感じる。

表皮であるので、このわたしに使われるのを待っている。

(新掲示板記入可)

■<錬金術師>

金を錬る前にすること、それは灰にすることである。手に取ったものを使い切ることである。

・・・というか、もしかしたら灰にすることが錬金なのかもしれない・・・

われわれ人間の錬金とはそのようなものかもしれない。

ただ、完全消化するという事かもしれない。

(参考) (20090201)

■オイゲン・ヘリゲルの灰

「弓と禅」の著者オイゲン・ヘリゲルは死の前に草稿をすべて焼き尽くしてしまった。死の旅立ちへの伴侶は、言葉ではなかったのである。

彼は、己の著作のなかに何を見たのであろうか。慢心か。西洋の論理の虚妄か。言葉の無為か。

あるいは、著作は残すものではなく、自分自身のためにだけ書いたものであったということなのだろうか。

あるいはまた、言葉はすでに肉化していたので、書かれた文字は不要となったのであろうか。

はたまた、言葉に感情を付与すること。生命を付与すること。これを成し遂げたのであろうか。

あるいは、言葉とはそのようなものではないと思ったのであろうか。

祖父が行くのは極楽浄土ではないのではないのか。

黒住教の「ありがたい」と病気治癒

賽の河原の石積み

続けることと結果を求めず行為を愛すること

昔、お寺さんで月に一回説教師の方が見えられてお説教をしてくださった。ある僧侶の方がこんな話しをされた。

「

普通の人は助けてくれる人の名を叫ばなくとも助けに行く。

だが、一声でも浄土に行ける70年間称え続けても浄土に行ける。

違いはあるのだろうか。

あるであろう。

道が違うのである。

どのような結果があるのかは分からない。

行為への愛=続けるということ

だから、一年間続けることもやがて続けることそのことだけになると思っている。

生きたいと思いつけているわけではないし、

生きいてやることをやり終えたからである。あるいは、生きていてやることをやり終えることができなかつたからである。

生きたいことは願っていない。そもそも、願いなど持っていないのだ。

願望成就の法についてはいろいろ言われているが、この二点に尽きるというのがわたしの世界観である。宝くじ当選から不老不死まですべてに通じることである。炎の魔人ジーニーに出会えなくともこの二点が願いを実現できる法である。ただ、いくら10億円当たるからといって、一年間当選を思いつけることはできないであろう。一年間思いつけるなら、もっと他のことがあるはずだ。貴重な一年間を10億円のために使いたくない。

未来永劫愛するという誓いを一週間で嗤って破り捨てた人もいたが、その人だけが特別に破廉恥なわけではない。ほとんどの人がそうである。行き当たりばったりの人生が自由だと思い、願いや誓いをころころ変える。そういう生き方の結実がよいと思う人はそれでいい。成熟前の小さな実だけをもぎ取って捨てていけばよい。

わたしは欲張りなので、そんな小さな実だけでは満足できない。捨てることもしたくない。その実をわたし自身の身体にしたい。そのためには、願い続けるということが必須なのであるが、残念ながらあまりにもこころの筋肉が弱すぎて思い続けることができないでいる。・・・・・・高塚のこの答えも最後・・・・寄付金を募る話し

(5) <錬金術師>～「願望成就の法」2<自己規定>

願望成就の法の二つ目は、この世でやるべきことを願うことである。・・・しかし、ほとんどの人はこの世でやるべきことなど分からないであろう。わたし自身でさえそうだ。気功治療は40歳前から30年以上やり続けているが、それはこの年齢になってから「どうも気功治療がやるべきことであつたらしい」ということに気づいたのであり、自分が願ったわけでもないし、自分の人生で気功治療の意味するところはいまだに判然としないでいる。

知的障害児の囲碁の話し

進化した星では勝敗を決するようなゲームはないという話し。
囲碁はト占に使ったという話しがあるが、もしかしたら囲碁は“形”を見て将来を知る、そういうものなのかもしれない。

アーミッシュの卓球は勝ち負けを争わない。ラリーを楽しむということか(要確認)。

(6) いまの願い

今の旅～「病気の人がいたら・・・」をしているところで、違うた
・・・教祖になりたいといわれた女性

(8) 「行為の的」<行為への愛><動詞><時空>

続けることと執着(あるいは結果への執着)との違い
続けることは存在である

●●質問の話し●●

“メッセージ性”が時間を超えていること、空間を超えていること
それは“成長”をめぐるひとりひとりの思いである。

なぜ質問なのか・・・大学の数学の授業
質問は人の第三の手と足なのである。
たたけば開かれる門、たたかなければ開かれない門

外と内の交わりはこの世界の行為である。

出演者

それを「知っている」という形で答えることができたとしても、それを“生きている”
と答えられる人は稀であろう、すなわち、

わたしは人間であり、人間を生きている

そう答えられる人は稀であろう。

質問が生じるというのは、分からない生じるのではなく、分かっているから生じるので
ある。

気功に関する話し

錬金術師の話し

錬金術師としての質問もある。それはツールとしての質問、つねに携えるべき質問で
ある。

質問3

●●「メッセージ」における<知識>●●

<自他> (人間関係) におけるメッセージの問題も他方ある。

質問5の考慮

(8) 考慮中の知識

ケルトの言霊と記憶

ブルーノ・グルーニングの言葉による病気治し

言霊と気の関係・・・あるいは言霊とエネルギーの関係

ラフカディオ・ハーンの無くならない匠の知識

(補足)

ただ、伝授できる気はある。

それはカルチャースクールにある気功教室で教えてくれる。そこで教えてくれる気はもともと講師の気ではなかった。だから与えることができるのである。

ただ、いばっていうのでなく、わたし高塚の気はわたしのものなので与えることはできない。

もちろん、同様にあなたから生じる気はわたし高塚に与えることはできないのである。

質問6

(3)の補足(補足)

対頂角は等しい

20歳の体験、30歳の体験の知る

ピース・ピルグリムの巡礼への準備・・・常に神がいること、常に至高体験をしていること

質問6の補足

舌切り雀～強弱という大きさ

「教室資料大きいものと小さいもの」参考

小さいもの～「南無阿弥陀仏」と内観法

イエスの(針の穴を通る駱駝のたとえ～親鸞の悪人正機説) 幼子

＝シュタイナーの神秘修行の第一条件

内と外～内の体験・外の体験(外の体験も内です)

シンプルライフ・出家⇄モノの所有

舌切り雀

■意識のある人生

もっとも大きいものを今日手にすること。

■知識

知識の問題は、感動の問題である。真の知識とは感動がある。感動なき知識、感情なき知識は真の知識ではない。

真の知識は人を変える力がある。

■呼吸

今あなたがどこにいるかはしりませんが、深い呼吸を一度してみてください。そして、あなたのまわりを見渡してみてください。

地球分の1ミリ、そのまた地球分の1ミリの球体にいる自分を想像してみてください。

あるいは、45億年前は岩石のかたまりでしかなかったこの地球を想像してみてください。

そして、今ここに体を動かすことができる自分がいるということを実感してみてください。

そしてまた、そんなことを知ることができるという自分を実感してみてください。

宇宙のひと息より、あなたがいました呼吸ひと息の方が大きいのだと実感してみてください。

そして、宇宙だけでなく、荒々しい人間のひと息があなたを襲うかもしれませんが、そのような時にはあなたの深いひと息の方が大きいのだと思い出してください。

この大きさは深く、静かであるという大きさです。

この大きさは知っているという大きさです。

この大きさは満たされているという大きさです。

そして、できれば、
いつもこのような呼吸をして、
いつもこのような呼吸でいれば、

世界はあなたとともに呼吸をするようになるでしょう。

■ 「ピース・ピルグリム」

<http://wiki.livedoor.jp/akashicrecord/d/%A5%D4%A1%BC%A5%B9%A1%A6%A5%D4%A5%EB%A5%B0%A5%EA%A5%E0#>

(コピー別紙)

■

「あなたを人間と呼ぶか何と呼ぶかは別として」

グルジェフ

テスト

女に化け物扱いされる猿田を慕うロビタ

■

もっとも大きいものと常にいること。

ヨガナンダの「歩くときは・・・」の話し。

この場合は、いつも窓を開けているということか・・・

■ 言葉

(注釈に「最初に光あれ」の話しを入れる)

■

感情のある言葉と感情のない言葉。

ここでは、感情のある言葉のもつ力についていっている。

いわば自力の言葉である。

他方、他力の言葉というものもある。

マントラはどちらになるのであろうか。

■この世界は、「表現」の世界である。表現と共にXから「世界」が表出、創造され

る。

(この質問のキーワードは、「世界」と「大きい」という言葉です。) →末尾

グルジェフの印象と表現

■逆の問い、この世界で最も小さなものは何か。

■パスカルの考え方を現代にあてはめると～

宇宙の存在の仕方の確率と人間存在の仕方の確率

(ただし、有機体としての宇宙、情報としての宇宙)

■大きな宇宙を見たとき、パスカルの知を見るかもしれない。

(大きなものが実は自分であることに気づくかもしれない)

だが、その大きさに見合うだけの人生を送っているだろうか。

あなた自身の人生を送っているだろうか。

(追記) 彩花ちゃんのお母さんのメモ用紙(レシート)～小さなもの

■

(注釈にこの「小さな声を聞き取る」ための瞑想の効用を入れる)

■教信

「一言芳談」より

「後世をねがはば、世路をいとなむがごとし。けふすでに暮れぬ。渡世はげまざるにやすし。今年もやすやすとたけぬ。一期いそがざるに過ぎぬ。よるにはふしてなげくべし、いたづらにくれぬことを。晝にはさめて思ふべし、ひめもすに行ぜむ事を。懈怠の時には、生死無常を思へ。悪人思惟の時には、声をあげて念仏すべし。鬼神魔縁等におきては、慈悲ををこして利益をあたへ、降伏の思ひをなす事なかれ。貧は菩提のたね、日々仏道にすすむ。富は輪廻のきづな、夜々に悪行をます。」

(柳宗悦著「南無阿弥陀仏」8ページ 岩波文庫)

■もちろん、聞き取れなかったときには白紙でも構いません。いつまでも白紙ということはありませんし、白紙は白紙で意味のあることです。

■このようにいうわたしも、自宅にはかつて買ってしまった、10万円の神棚と80万円の仏壇とがあります。こんなものは、いっさい不要だとわたしは宣言します。このように神棚も仏壇もいらぬという人間は罰当たりというのでしょうか。天罰が下るのでしょうか？ いやがらせという人罰は下るかもしれませんが、天は罰しませ

ん。なぜか、天の住まいも仏の住まいもこの世界ではありません。この世界にきれいな住処を用意してくれなかったからといって天や仏が何を怒る必要があるでしょう。天が出てくるところ、仏が出てくるところは、神棚や仏壇だけではありません。あなたが出てくるところに出てきます。この世に10万円のノートはありません。10万円の宝石をノートにちりばめるのは自由ですが、だからといって立派な神様や素晴らしいご託宣がいただけるわけではありません。神棚も仏壇も同じです。

■ (注釈～ヨガナンダの丸い石の話～あらゆるところに神仏がいると知っていながら、盲信者を軽蔑する愚)

■ 一遍上人への熊野権現のいさめ

一部分をきれいしにして、他を(仏壇を買ったときの話し)きれいにしておくところはそこだけではないということです。(注釈 ただし、こういう話しはあるという意味での「ヨガナンダと丸い石」の話し)

ただし、あるものには敬意を表することです。(母の教会での出来事)

.....要追記の質問.....

●● 質問10「この世界・この宇宙にとって人間は必要か」～<神と人間> ●●

毎日遠隔治療をしている方から体調のご報告と共に日々の出来事をお知らせいただいています。先日はこんなお話しでした。マンションのベランダで色々な植物を育てているのですが、ダンゴムシの働きを見ていると、この世界が循環サイクルで全てのもので世界を育み、維持しているのだとしみじみと感ずることが出来ます。そして、その完璧なシステムを作ったのは誰かという問題に導かれます、という、そんなお話しでした。

誰がそのシステムを作ったかは置いておいて、そこでふと思ったのですが、

<この世界に人間は必要なのだろうか>

<この宇宙に人間は必要なのだろうか>

人間はダンゴムシのように働いているのだろうか、という疑問です。

(1) 宇宙・世界の定義

まず、世界、宇宙の定義をはっきりさせておかなければなりません。わたしの世界・宇宙のイメージは常識とは相当異なるからです。なお、世界といっても宇宙といっても私にとっては同じことです。世界という時には“具体性”を強調しています。宇宙という時には“大きさ”を強調しています。

今から30年近く前にある学会の懇親会でオペラ歌手の方と名刺交換をしたあと、突然こう聞かれました。

「高塚さんは宇宙とは何だと思えますか」

(一瞬絶句して・・そりゃあそうだ。初対面でいきなりその質問はありか、と思う。)

「正直分かりません。ただ、螺旋のようなものと思っています。螺旋は円運動して同じところを回っているようですが、同時に全体としては同じでないのです。」

答えにはなっていませんが、紳士であるオペラ歌手氏はこいつはダメだなどという表情は見せず、

「ありがとうございました」

といい、別れました。ただ、いまではもう少しまともな話しができます。それは、バックミンスター・フラーのこの詩を知っているからです。すでに引用していますが、再掲します。

私は地球で生きている。
けれども私が何者か、今も自分でわからない。
カテゴリーなんかでないことは、
それでもちゃんと知っている。
私は名詞なんかじゃない。
どうやら私は動詞のようだ。
進化していくプロセスだ。
宇宙の積分関数だ。

これは、バックミンスター・フラワー自身の“私”の定義です。あるいは、人間の定義です。そして、わたしからすれば、これは世界・宇宙の定義でもあるのです。

世界・宇宙は箱ではない。名詞であるモノを入れる箱ではない。あるいは、箱の中に名詞というモノを入れたモノの総体でもない。それはモノの営みの動詞全体であるということなのです。したがって、わたしはこのように定義します。

「人間、動植物を問わず、有機物、無機物を問わず、物質界、精神界を問わず、あらゆる存在者の、あらゆる営み、そして、その営みの結果生じるすべてを宇宙(=世界)と呼ぶ。宇宙はこれらの変容のプロセスである」。・・・←原因体としての宇宙がない・・・

具体的な話しとして、わたし個人の場合でいうと、

わたしは肉体である。そして、これは宇宙である。

この小宇宙は、出生の昭和26年2月23日の10か月前から母の胎内に居住し、山口県の下関市で幼少を過ごし、上京後は杉並区の高円寺に住み、成人後は、横浜市の沢渡、東京大田区の矢口渡、新宿区の早稲田、新宿区の代々木、大田区の・・・、千葉の花見川区に至って、69年間、この宇宙と共にこの小宇宙もあった。いや、胎内からもふくめれば70年間である。

宇宙が動き続けているように、わたしの肉体という小宇宙も居住地を変えることのみならず、日々動き続けてきた。休みは一瞬たりともありえなかった。

宇宙が動き続けているかぎり、わたしも動き続けるのである。
いや、わたしが動き続けるかぎり、宇宙も動き続けるのである。

あなたもあなたの小宇宙の動きを振り返っていただきたい。

繰り返すが、それを肉体と呼ぼうが、それは宇宙なのである。あなたが、これまでの人生を鳥の眼で“一瞬にして”見るなら、それがあなた個人だけでなく、宇宙の動きであったことを知ることができるであろう。

精神もまた同様である。

グルジェフは「印象は一瞬でも途切れては生きていけない」と喝破したが、まさにわたしは印象とともに生きている。さらにいうなら、表現とともに生きている。印象と表現、これはわたしの呼吸である。

わたしは世界を吸い、わたしを世界に吐くのである。

わたしは世界から印象を受け、わたしを世界へと表現するのである。

世界はこのような“精神”で満ち溢れている。精神とは神の精である。神の精とはひとりひとりの表現である。

あなたの表現は世界に確実に残る。ただ、あなたの今日の表現がいつまでも世界に残っているわけではない。それは、あなたの表現が何を目指しているか、その表現をずっと続けているか、そしてその表現を強く願っているかにかかっているからである。

ともあれ、いかなる人も表現者である。それは、世界に刻まれるのである。刻まれてきたのである。おそらくそれがアカシックレコードと呼ばれるものだ。そして、そのアカシックレコードとはこの宇宙のことなのだ。

宇宙とは断じて物質を入れる箱でない。もっと、動的なものであり、生きているものなのだ。ですから、こう定義しなします。そう、

<宇宙・世界とは、生命なのである>

<宇宙・世界とは、われわれの呼吸でできた生命なのである>。

(2) 新たなる問い

このように宇宙・世界を<生命>と定義をすれば少しは展望はよくなる。なぜなら、

<生命>といったときには、宇宙とか世界とかいったときとは異なる感覚が生じるからであり、生命はわたし自身でもあるからだ。で、再度問う。

「<生命>に人間は必要なのだろうか」。

もしかしたら、かえって意味が分からなくなったかもしれない。箱宇宙はイメージしたことはあっても生命については考えたことはないからだ。

この質問は質問としてここに留め続けるとして、質問を変える。必要かどうかと問い続けた時にこちらの表面に新たに浮かんできた質問である。

●● 続・質問10 「あなたは<生命>のために何ができるか」 ●●

生命が人間を必要としているかどうか、これは分からない。
ただ、人間は生命のために役立つことをすることはできるかもしれない。

できるとしたら、それは、いったい何であろうか。

今日、わたしは生命のために何をするのであろうか。

.....

(3) 空き缶の生命

実にささいなことを書く。

今朝自宅からマロンドへ行く途中、たぶん随分前からなのだろうが、車につぶされてペしゃんこになった空き缶があった。今日は缶回収の資源ゴミの日、後ろから人が来ていたのでちょっと恥ずかしかったが(なぜ恥ずかしいのかは不明である!)、拾って回収の箱に入れた。やり終えると気持ちがいい。なぜか。

それは、生命に役立つことをしたからだ。

空き缶のいる場をいるべき場に変えたからである。ある意味、本当にある意味だが、空き缶の生命に寄与したのである。本当は手かざしをして人の命を救ったことでも書けばいいのかもしれないが、わたしにとっては、人の命も空き缶の生命も同じなのである。

誰でもが生命のために役立つことをすることができる。

だが、それは、生命を何と考えるかによって変わってくる。

生命が肉体の命のことであり、私の肉体の命を維持させ喜ばせることを人生と考えるなら、それは生命を小さくとらえている。

わたしは何も空き缶に命があるといったり、空き缶拾い、ゴミ拾いを勧めたりしているわけではない。

空き缶がリサイクルされ、またこの世界で役割をもつことができるなら、それは空き缶が生命を得たと思うのである。その生命にわたしは寄与したということなのである・・・いや、それでは何かが抜け落ちている。小賢しい説明だ。

おそらくはこういうことだ。

生命は私に語りかける。

「空き缶がつぶれているぞ」

その声は小さな声なので、聞こえずに目だけが空き缶にくぎづけになる。

私はその声を振り切ることもできる。そして、数え切れないほど振り切ってきたし、いまもまたそうである。

何十回、何百回、何千回、聞いて振り切ったその声に、その時だけはなぜか自然に聞くことができたのである。私は空き缶を拾うのである。

そして、その声は日常となるのである。

生命はわたしとなるのである。

ただ、その生命は無数にある生命の声、無数にある生命の顔のたったひとつにすぎない。

だから、生命はずっと問い続けるのである。

「ここに空き缶がある。どうするのか」

ささいなことから命にかかわることまで、常に生命は問い続けるのである。

だから、学校に入った無差別殺人者の前で、アーミッシュの少女はこう言ったのである。

「わたしから撃ってください」

これは、洗脳されて少女の脳が語ったのではない。

これは、生命の声なのである。

彼女は自分自身の命は救わなかった。しかし、彼女は生命の声を語り、生命を救った

のである。

生命にはいろいろな顔がある。われわれが見ているのは、額にかかった髪の毛一本だけであろう。一本の髪の毛以外の顔も見たいとは思わないだろうか。

<他の顔を見るには、見なければならない>。

では、生命の顔はどうすれば見えるのであろうか。あるいは、こういった方がいいかもしれない。

「これまでの人生でいつ生命の顔を見たであろうか」

・・・その道しるべは、“感動”である。いかなる感動も生命の顔を見たことによるのである。感動、それは別名“リアリティ”である。生命の顔を見る時リアリティが生じるのである。

生命の顔を見て、生命の顔を表現すること

(4) ALS患者の囑託殺人

彼女は命はいらないといったのである。このままでは“彼女の生命”は死んでしまうといったのである。

生命に客観性を付すことはできない。

それは絶対的な主観である。だから、彼女にもっと生きていれば違う世界が見えるなどとは、誰ひとり言うことはできない。たとえ神であっても。

(「リアリティ」の経験談(17歳の時の手術)を入れるか否か)

(5) 動物の<生命>

一個のハンバーガーには100頭の牛が含まれているという。なぜそんな作り方になるのか、効率よくということなのだろうか。ところで、ハンバーガーには牛100頭のかけらもない。しかし、もしあなたが牛100頭を殺してからでないでハンバーガーを食べられないとしたら、食べるであろうか。いや、そこまではいわない。もしあなたがあなたの食べる牛100頭が殺される映像を見てからでしか食べられないとしたら、食べるであろうか。

昔飲んだくれ人生を送っていた時、ある飲み屋でアジのタタキを注文したら、生き造りのアジが出てきて参ったことがある。まだ動いているのである。魚の目と目があつたとはいわない。魚の目は目線を合わせるような目ではないからだ。どこか遠くを見ているような目だ。どこを見て何を考え、どのように苦しんでいたのか分からない。早く死んでくれと願って30分ぐらいたってから、その生ぬるいアジをのどに流し込んだ。

動植物を殺して命を食べるならば、同時にこの世界である<生命>をも食べなければならぬ。

生命を食べるとはいかなることか。

それは今日出る生ごみ量のだけ、今日を生きる、ということである。

わたしは今日を生きたのであろうか。

思うに、わたしの場合、それはアジの断末魔の苦しみのように、わたしの思いを書き、わたしの手をかざし、そして、とことん人生を楽しむ、これ以外には考えられない。

(参考) 道元の食事の作法の本

(参考) 津江の久作

そしてまたこう思うのである。もし動物に生命があり、それを食べているのだとしたら、そうであるなら、わたしはこの人生の終わりに、食べられる<生命>のひとかけらになるというのが筋というものであろう。

生命のひとかけらとは何か。それはわたしには表現以外に考えられない。

表現とは何か。

それは、一人ひとり違う。印象と表現がその人であり、表現は主観的真実であり、異なるからだ。

わたし高塚の場合、表現、それは、

早朝から深夜まで、一日の多くの時間を費やしている気功治療であり、

永遠に続く、終わりのない、このレポートの下書きであり、

そして、時に、友人や師匠と指す将棋であり、

そして、時に、縁ある人と酒を飲んで闇鍋となることである。

この世界は肉を食べるだけで生きていく世界ではない
あるいは、目に見えるものだけを表現してそれによって生きていく世界ではない。
見えざる表現によっても生きていける世界である。

シッダールタは釈迦になる前の人生で飢えた虎の親子に身を投げて自らを食べさせたという。これは肉体の命の話ではない。シッダールタの<生命>の話なのである。

虎の親子はその生命を食べたであろうか。

それは分からないし、それはどちらでもいいのである。

ただ、確かなことは、時に恐れず、自ら命を差し出せば、それは<生命>となることもあるということだ。

シッダールタは死んで生命となった。

そういうことだ。

(再読)「神話の力」

(6) 植物の<生命>

植物の生長。

(7) モノの<生命>

モノは使い尽くして初めて死ぬことができる。

そして、死んで生命となるのである。

前世のシッダールタが虎の親子に身を投げたように。

ピース・ピルグリムは生涯を平和の伝道にささげた。「平和の使者」と書かれたパーカーをはおり、バックパックさえ持つことなく、ポケットにハンカチと歯ブラシだけを入れて、全米中を歩き人々と平和について話した。

ひと晩の寝床と食事を供される人に会うまで歩き続けたのである。

彼女のすり切れた靴を見て、ある人が靴を差し出したが、受け取らず、履き続けた。

履けなくなった時に初めて、靴は亡くなるのである。

そして、亡くなった時に初めて、靴は生命を得るのである。

・・・こう書いた以上は、わたしはモノを使い続けなければならない・・・

(参考)「新・ハトホルの書」

(6) 生命と私との収支

収支はどうしても合わない。

親子の経済的関係のようである。

この関係で見る限り、生命と私との収支は永遠に合わない。

だが、そんな不合理なものがこの世界にあるとは思えない。

合理は、わたしの根本的な世界観だ。だから、きつこうなのだ。

私は50歳を過ぎても大酒のみであった。転倒して二度救急車で病院に運ばれた。死ぬまで酒をやめることはできないと思っていた。しかし、ある患者さん宅に毎日のように手かざしに行き始めたころ、ふと思った。

「前夜酒を飲んで行く、それはないだろう」

生死の境目にいる方である。「それはないだろう」というふとした内からの声であった。

その方は結局亡くなられた。亡くなられたが、私はその後も酒を常飲することはしなくなった。手かざしに行っていた時点では、収支は合わない。片道1時間の距離のお宅まで通い続け、いただいたのは交通費と少々のお礼である。しかし、亡くなられたあとにお父様から相当な額の謝礼をいただいた。また何よりも、

「お酒を飲まなくて生きていける」

ということをいただいたのである。さらにいうなら、もっとやりようがあったのではないかと、おのれの手かざしの未熟さを知ったのである。

だから、生命についても同じことが言えるのではないかと思っているのである。

きつと、生命もまたわたしから多くのものを得るのである。

今は収支はあっていないであろう。

しかし、いつか生命は、わたしに与えてくださっているものより多くのものを手にするのではないかと思っている。

それは何か。

それは一体何であろうか。

きっと、生命の成長である、そのように思っている。

(7) 三つの観点

生命への貢献

生命Ⅰ～物質・エネルギーとそれを司る意識

生命Ⅱ～主観的真実

生命Ⅲ～生命の樹(わたしの樹・地球人の樹・地球の樹・銀河系の樹・宇宙の樹・・・)

(8) 異世界への参入

霧に生命を感じることに、歩く時に六方位を意識すること、ある種の霧には意識があると聞いているので(「ハトホルの書」、霧に意識を向けてみましたが、う～ん、でした・・・でも、しばらくは、これまで目を向けていなかったことに“感性”を開いてみます・・・

歩きながら6方位に意識を向けています(ただし、白昼夢に陥っていない時だけです)。これもこれまで目を向けていなかったことに“感性”を開いているということです・・・目的は、

<視点を換え、視野を広げ、生命、知性と感性、自由の時空の旅人となるためです>。

そのためにすることは山のようにあります。この山は無限大の大きさの山です。

(2020年7月19日7月19日日記)

見るのは自分の眼でということは、見るというの自分自身の問題であるということだ。

ただ、あるかすかな小さな声に耳を傾けるなら、動かないものにも生命を感じ取れる

かもしれない。

そして、あなたが、今見た、生命、その生命のために何かができるかもしれない。

立ち止まること。

立ち止まり、まわりを見ること。感じること。まわりの風景に溶けこむこと。

そのように立ち止まれば、

(8) (答え候補) <生命・知性と感性・自由>

自由という人間の本質を活かすこと。

道標は深い満足感という感情である。

自由については、将棋を思うこと。

初心者の自由な将棋はおもしろくない。この自由はでたらめという自由だからだ。

自由といっても“筋”、“理”(ことわり、玉の筋目)があり、そこに到達してこそおもしろいのである。

筋目に生きざるとえないという意味では、自由ではない。

自由ではないが、それは選択肢が自由にあるというなかでの“自由意志”を行使するという意味での偉大な自由である。

しかし、その筋目を追いかけるとどこに行くだろうか・・・必勝という“将棋の神”に到達するのだろうか・・・それは違うような気がする・・・まるで質の異なる世界に到達するのではないかと思っている・・・

>今日、わたしは生命のために何をするだろうか。

わたしが<時空の旅人>として生きること。

わたしは、外界、内界、異界のすべてを旅する旅人である。

旅をしながら世界に見て、世界にふれ、体験し、そして、世界を揺り動かす。

これがわたしの生命への貢献である。

わたしはわたしの生命と世界の生命を使い、旅するが、同時にその旅で感じたことはすべてわたしのものであると同時に世界のものである。

それがわたしの生命への貢献である。

だから、生命への貢献とは生命をとことん使い果たすことだと思っている。

そんなことができるか。

いや、そんなことができるといえるほどわたしの生命と世界の生命を使い尽くしたい。

<生命・知性と感性・自由>のために生き、変容成長すること。
自己の変容、成長とは

(個人的答え候補) エゴに生きるか生命に生きるか

2020年7月10日

日拝・水シャワー

遠隔治療・遠隔治療・地球瞑想・・・誠心誠意行うこと、ベクトルであること、気の世界に入ること・新たな気の世界を感じる

気功体操・四大元素の詠唱・・・私がするのでなく、風になること・気になること、四大元素になること

徒歩・・・肉体は自分のものであるという側面と自分のものでないという両側面がある・・・自分のものでない側面に生きると徒歩に健康を促すことができる

マロンドでの朝食・・・生命を食べたら、それを生命とすること

日記の下書き・・・生命に生きているような日記とすること

部屋への挨拶・・・おざなりとならないこと・・・部屋と部屋で活動できることに生命を感じる

ハトホルの「いまだ問われざる問い」

(参考)「神対」の思い・体験・存在

- 1 わたしとわたしの体との関係、わたしとわたしの精妙なるエネルギーとの関係。
- 2 わたしとわたし自身との関係、わたしと他者との関係。
- 3 わたしとわたしの宇宙との関係、わたしとわたしの社会との関係。
- 4 わたしと聖なる四大元素との関係。

●● 質問 1 1 「あなたの神」～<神と人間> ●●

あなたの神は何であるか。

ここでいう神は世間で言われている神ではない。ここでいう神とは、次回の人生であな
たがかならず“当たる”ものである。

わたしの場合、それはこの草稿である。

わたしは、次回の人生でかならずこの草稿に当たる。

草稿がネット上から消えていけば、この草稿の精神に当たる。

次回の人生の損得勘定、常識、・・・は決して当たることはないが、次回の人生でわ
たしがいけば、わたしはかならずこの草稿に当たる。

当たるものが神であるので、この草稿はわたしの神である。

そして、もうひとつ神がある。それはこの草稿に書かれている言葉を実現すること
である。そう、

わたし高塚は<言葉の表現>と<その言葉の身体表現>とをわたしの神とする。

すなわち、自分を語り、その語った自分を身体化することがわたしの神である。

では、あなたの神とは一体何であろうか。

(0) 答え

もちろん、客観的答えはありません。

あなた自身の答えがあるだけです。

わたしは、その答えを主観的真実と呼びます。

誰が何といおうとそれは尊い真実であるからです。

● 「若木を育てること」 184～「エントロピーと<所有>」(加筆して再掲)

金銭があればエントロピー減少(秩序化)を買える。壊れた自動車修理も汚れた部屋の掃除も排泄物の処理さえもお金で片がつく。

だが、買えないものもあるかもしれない。

自らがエントロピー減少を行わなければならないもの、そんなものがあるかもしれない。

あるとしたら、それは一体何だろうか。

(2017年2月6日新掲示板)(2020年5月31日新掲示板)(草稿転記済み)

2月8日、9日2017年

●「若木を育てること」186～「草稿」～「エントロピーと<所有>」

>金銭があればエントロピー減少(秩序化)を買える。壊れた自動車修理も部屋の掃除も排泄物の処理もお金で片がつく。

>だが、買えないものもある。

>自らがエントロピー減少を行わなければならないものもある。それは何だろうか。

それは、たとえば、

<健康>

<自己実現>

<新たな選択>

これらは自らがわたしのものとするものであり、金銭で買うことはできない。

健康とは、病気のお金をお金払って医者にかかったり、癌になったときに保険外の高額の医療費をはらって得る健康ではない。自らの肉体を維持するために、日々からだによいものを入れ、運動をし、一瞬一瞬からだによい考えをもつという努めを行うことによって得る健康のことである。

自己実現とは、当然ながら他者実現ではない。自分の子供が自分の思い通りの子供になるか、あるいは、ならないか、これは子供という他者によって決まるのであり、自分によって決まるのではない。どこかの大統領が自分の思い通りになるか、ならないか、これも同様である。子供であれ、大統領であれ、他者があなたの思いを実現して

くれるかどうかは分からないのはもちろんのこと、もっと分からないのは、

<はたして、あなたの思いというのはあるのだろうか>

ということである。自己実現の方法の本はちまたにあふれているが、あなたについて知ることができるのは、あなた自身によってである。実はこれは大変な作業なので、ほとんどの人の自己実現というのは「他人によって教えられた価値観の自己」の実現なのである。自分のうちから生ずる衝動、これは必ずしも崇高なものとは限らない。ときに人に迷惑をかけたり、場合によっては人を傷つけたりするような衝動かもしれない。しかし、それでも金太郎あめのような人生を生きるよりはるかのよい。そこには自分自身の深い感情があるからだ。

選択・・・、実はこれこそが人間であると自分は思っているのであるが、・・・自分が善人か悪人か、他人が善人か悪人か、そんなことはどうでもいい。わたしにとって価値があるのは、

どのようにして、悪人が善人になったか、

どのようにして、善人が悪人になったか、

という選択であり、どちらもわたしにとっては尊い行為なのである。なぜなら、この選択こそが<わたし>であるということだからだ。この変容こそが人間であるということだからだ。

だから、いつもあたりまえのことだけを話し、いつもあたりまえことだけをして、それを良識といって悦に入っている人間がいちばん嫌いだ・・・昔から・・・

そして、こういう人間がいちばん他人を傷つけるのである。

(2017年2月8日新掲示板)

●● 質問11 「アーミッシュ」～＜自己規定＞ ●●

2006年10月、アメリカのペンシルバニア州の学校で銃の乱射があり、4人のお子さんとひとりの教師が亡くなりました。犯人の動機は不明であるが、わたしが記事で関心を持ったのは、絶対的平和主義を唱えているという「アーミッシュ」というキリスト教の一派の考え方である。そのアーミッシュの学校で事件があったからだ。ネットでざっと調べたところ、

- 1 電気を使用しない（従って、電話も使用しない）
- 2 服装は質素
- 3 成人は決められた色のものしか着ない
- 4 自動車は運転しない
ただし、旅行の際は、車や飛行機を利用するのも可
- 5 風車・水車により蓄電池にためた電気を使うことは可
- 6 写真はとることもとられることも原則不可
- 7 政治には積極的に有権者として関わらない
- 8 共同体外部の異性と交際することはまずない
- 9 ただし、これらの宗教上の制限は成人になるまでは猶予される
- 10 幼児洗礼を認めず、成人して自らの意志で洗礼を受ける

このような規律のもとに集団生活をしている。

これらをナンセンスと斥けることはたやすいことであるが、わたし「日本人高塚」はアーミッシュではない、だからこそ、アーミッシュの社会で育ったと思い、ひとつひとつについて見直してみるということは有意義なことである——そのようにすれば、他の視点から「日本人高塚」を見ることが出来るからである。

なお、わたしにとっては、意味あることも無意味と思えることもある。どちらとも言いがたいこともある。

これらひとつひとつのきまりについて、あなたはどのように考えるか。

(1) ふたつの幸せ

- > 1 電気を使用しない（従って、電話も使用しない）
- > 5 風車・水車により蓄電池にためた電気を使うことは可

電気を使う幸せと電気を使わない幸せがある。

電話を使う幸せと電話を使わない幸せがある。

かなり前で携帯電話などない時代である。就職が決まり職場をやめた学生パートのH君と飲む約束をして新宿紀伊国屋書店の前で待ち合わせた。当日は台風でH君の乗った電車が遅れたが、彼ならきっと来ると重い、1時間半待っていた。H君は高塚さんだったらずっと待っているだろうと思ったといい、やってきた。

こういうこころのふれあいというのは、携帯電話があっては成り立たない。

だから、ない方がいいとは言わない。

ただ、ないという不便さのなかでも幸せはあるということだ。

さらにいうなら、不便ゆえに生じる“何か”というものがあるということだ。

(2) 電燈

また、こういう電燈の話もある。電燈で電気を使っているのだが、現代の煌々(こうこう)とした明りの電気とは違う。「弓と禅」の著者オイゲン・ヘリゲルの弟子で、訳者でもある稲富栄次郎による、切り取られたひとコマの世界である。オイゲン・ヘリゲルは哲学とラテン語の講義のために、ドイツから東北帝国大学に赴任した。街中とはいえ、戦前の東北の地での話しである。以下、引用。

講義がすむと、上田と私とはいつも博士と一緒に、人影もない大学の構内から、雪に氷った夜の街を、鈍いゴム靴の音をひびかせながら、片平町の官舎の前まで歩いて行った。道すがら話題はいつも学問上のことばかりに限られ、博士は吹雪の中で、いつも手を振り、体をゆさぶって熱烈に談論せられた。そして官舎の前まで来てもまだ話はずきず、しばらく立ち止まって談論を続け、話がけりがついたところで、やっと「ではさようなら」と言って官舎への道を下りてゆかれたのである。その時真暗い吹雪の中で、官舎の電燈にぼんやりと映し出された先生のシルエットは、今なお私の眼底にこびりついて離れない。

(オイゲン・ヘリゲル著・稲富栄次郎・上田武共訳「弓と禅」158ページ 福村出版)

このような電燈は、そしてその電燈があって生じるシルエットは、わたしには好ましいものである。見たことのないシルエットであっても忘れることはない。

そして、もしかしたら、見たのかもしれないし、将来、見るのかもしれない。

そんなわけの分からぬことを言うぐらい印象的な姿である。

この姿を映し出したのは戦前の電気である。だが、令和の世の電気では映し出せない形であり、影である。

(3) ろうそく

四、五年前のことである。ふと、電気を消してろうそくの炎だけで夜を過ごしてみようと思い、お皿の上にろうそくを立てじっと見ていた。ろうそくの最後は断末魔の叫びのような大きな揺れとともに終わった。ところが消えた瞬間、お皿の上に銀河系の光のような煙が円盤形に広がったのである。炎の最後と同様、煙の最後も乱れた煙で終わるはずが、まるでそこにある力が働いたように、きれいな円盤状の煙というか光が生じたのである。さらに、そんな円盤状の煙は一瞬にして真ん中から円心上に消えていったのである。

電気の明かりは1千回、1万回、同じ光を放つ。
しかし、ろうそくの光は1回1回異なって生きるのである。

だから、時に信じがたい光の塊となるのである。
そう、あの時のろうそくの光は最後に銀河系になり、銀河系として消えていったのである。

(4) 伝道師

シッダールタやイエスは電気がなくとも自分自身を達成し、伝道した。

現代の伝道師であったピース・ピルグリムは、バックパックひとつさえ持つことなく、「ピース・ピルグリム(平和の使者)」と書かれたパーカーにハンカチと歯ブラシだけを入れ、食事と宿が提供される人に出会うまでひたすら歩き続けた。

わたしは彼らのような伝道師ではない。また、この小文のメッセージはネットを通じて公にされている。

しかし、わたしのしていることもまた、電気やネットがなくとも達成可能なことかもしれない。

また、そのような達成可能なことをすべきなのである。

(5) 服装

> 2 服装は質素

> 3 成人は決められた色のものしか着ない

このような規律は私にとってナンセンスであるが、おそらくは、こういうことだ。

<大きな声を出さない>

ということだ。もともとの意図するところはそういうことだろう。マイクを使うような自己主張はしないということだ。

また、こういうことも言える。

<裸がいちばん美しいのであるから、裸でいなさい>

ということだ。ミロのビーナスに洋服を着せないということだ。だが、残念ながらまだその域にはわれわれは達していない。だから、この「裸でいるというセンスのいい直感」を生かそうとすると、裸を肯定する宗教教団のなかで、教祖のSEX 奴隷が生じる世界が出来上がったりする。良き直感を曲解させてしまう。

ともかく、華美を廃するというのは、「裸でいることのセンス」へのほんのひと振りの直感なのである。

そして、もっと現実的な話しをする。囲碁の菊池康郎氏の服装である。

まだ暑さが残る九月も終わりのころ、碁会所「秀策」で菊池康郎氏を十年ぶりにおみかけした。かなり高齢になられていたが、そのいでたちが昔でいうところのヒッピー、その少し前でいうなら托鉢僧のような服装で、それがぴたりと決まっている。

よく「馬子にも衣装」と言い、衣装が人にまさっているようが多いが、菊池氏の場合はまさに菊池康郎というヒトが衣服を着て、菊池が着たから衣服もそれにあわせて人柄になっているという感じなのである。これほど衣が人にしがっているというのは久しぶりに見た。

まあ、こういう服装であれば、色にこだわることもないであろう。

(6) 使用

服装の話ではないが、ピース・ピルグリムは靴がすり切れるまで履き続けた。

これはまさに質素の極みではないだろうか。

ピース・ピルグリムにとっては、靴の色が赤であろうが黄色であろうが問題ではない。

質素の極みは、使い尽くすことである。

そして、その時モノは変容する。

(7) 徒歩行

> 4 自動車は運転しない

ただし、旅行の際は、車や飛行機を利用するのも可

精神世界ではよく“身体は神殿である”という。にわかには分かり難い話しであるが、同時に何か大切なことを言っているのではないかという気がする。

以下、引用。

1971年1月18日、私は、サンフランシスコのゴールデン・ゲート・ブリッジ周辺の海上を、300万リットルを超える原油が漂うのを目撃した。原油流出だ。初めて目の当たりにする大規模な環境破壊だった。車でゴールデン・ゲート・ブリッジを渡っていた私は、海辺を覆う惨状に自分にも責任の一端があると感じた。一年近く経っても自責の念は消えず、私は自動車を運転することをやめ、歩くことにした。

この決断は地元で話題になった。友人たちは、人一人が車をやめて歩くことにしたぐらいで、何を変えられるのかと言って、ひっきりなしに私をとがめ、議論を浴びせてきた。そこで、こうした周囲の干渉を断ち切るため、あるときまる一日、ひとことも口をきかず、沈黙を守ってみた。人生は、一変した。沈黙の一日を過ごしてみて、自分が始めたのは心身の両面における、巡礼の旅であることに気づいた。環境への意識を高める学びの一環として、徒歩、そして帆船で世界をめぐる、地球の環境保全と世界平和を無言で説く旅へと足を踏み出したのだ。

(ジョン・フランシス著「プラネット ウォーカー」3ページ・日経ナショナル・ジオグラフィック社)

人一人車を使わなくなっても環境破壊に影響はない。

だが、車を使わなくなると、沈黙を始めることにより、ジョン・フランシスその人はまるで別な人になる。沈黙して歩くという体の使い方は、身体の神殿化であるからだ。そして、その神殿をたずさえたジョン・フランシスというウォーカーが環境破壊に影響を与えないということは、わたしには考えられないことである。

ジョン・フランシスの沈黙の徒歩行は、ある力となるからだ。

(8) 真を写す

> 6 写真はとることととられることも原則不可

わたしにとってこの規律の意味はこうだ。

<あなたは、安易ではない>

あなたは、シャッターを押して、あるいはスマホのパネルにふれて、それだけであなたを写すことができるほど安易な存在ではないということだ。

だからまた、もしわたしがあなたを写真にとるのでなく、どれほど稚拙であっても鉛筆であなたの似顔絵を描くなら、それはあなたなのである。

そのようにしてであれば、描くことも描かれることも可なのである。

(9) 「ナパーム弾の少女」の写真

ただ、他方、写真でしか伝えられないものもある・・・

裸で泣きながら路上を歩いている少女の写真である。

ある年齢以上の人であれば、この写真はほとんどの人が見ているであろう。でも、初めて見たら何の写真なのかは分からない。

「ベトナム戦争」

このキャプションをつければ分かる。さらに、

「家と人を焼き尽くすために開発されたナパーム弾により両親が殺され、自らも顔以外に全身やけどを負ったベトナムの少女の写真である」

とつければ、もっと分かる。しかし、もっと分かるのは、この一枚の写真を見ることである。



戦争に関して語るのであれば、写真ほど雄弁なものはない。

ヒロシマ、ナガサキを語るのであれば、日本国総理大臣の言葉より写真一枚の方が平和を希求する。

写真はある一瞬を表現することにおいて稀有な方法なのである。

(10) 「地球の出」の写真

人物をとった写真ではないが、月面からとった「地球の出」の写真がある。



これは地球の写真というより、

<地球の姿をとった写真である>

<地球の魂をとった写真である>

この一枚の写真で、一瞬にして地球の何たるかを知ることができるからである。

なお、写真は安易だと書いたが、この写真は安易ではない。アメリカが莫大な予算と準備を費やし、成功するかどうかわからない宇宙飛行士の命がけの心意気がかかった写真だからである。

映画「2001年宇宙の旅」の原作者であるアーサー・C・クラークはこういった。

「この一枚の写真だけで、宇宙飛行に莫大な金をかけた価値がある」。

そういくらかかったかは知らないが、間違いなく多くの人の世界観を変えてしまったのである。たった一枚の写真がである。こんなことがあるのである。

アーミッシュはこの写真を見たであろう。見たならどう思ったであろうか。

(11) グルジェフの眼

精神世界の巨人のひとりであるグルジェフには一時期 100 人ぐらいの弟子がいて、起居を共にしていた。そのうちのひとりで、当時は 10 歳そこそこであった少年フリッツ・ピーターズが後年グルジェフの思い出を書いていて、その話しである。

「彼はいつも関心をもっていた。彼に会っていたときはどんなときでも、私に用事を言いつけたときはいつでも、グルジェフは完全に私を意識し、私に話す言葉に完全に集中していた。私が彼と話していたとき、彼の集中が一度として私からそれたことはなかった。わたしがすませてしまったことも、いつも正確に知っていた。思うにわれわれはみな、わたしは確かにそう感じていたのだが、グルジェフがだれかと一緒にいたとき、その人は、グルジェフの全注意力が彼に向けられていたのを感じたに違いない。人間関係において、これ以上の敬意は考えられない。」

(フリッツ・ピーターズ著「魁偉の残像」めるくまーる社 ページ)

グルジェフの関心という眼は相手のすべてを写し取ろうとしたのである。

すべてである。

その人自身が知っていることも知らないことも彼の眼の中に写し取ろうとしたのである。

この彼の眼のなかの写真を見ることができるのは当のグルジェフだけであるが、同時にこの写真のなかで相手にとって必要なことならば、その人自身の姿を取り出して見せたのである。それが真の師弟関係というものであろう。

(12) 身体という写真

古い写真を見ることは、風景でも人でも人工物でも好きである。

それを手がかりにして、その写真の世界に入ることができるからである。

しかし、そうは書いてみたものの実際に入りこむことは稀である。特に自分がとった写真を見直すことはまずない。

買っただけで使うことのないモノのようである。

押入れ、物置に死蔵されたままのモノ、アルバムにさえ貼られることのない写真、スマホやパソコンに整理されたままの写真、これらは一体何なのか・・・

私がしたことは写真をとったということだけだ。

しかし、本当は、写真をとるのでなく、永遠に眼(まなこ)に刻むこと、このことが求められているのではないだろうか。

身体は神殿であるというが、この神殿を使うということは、写真をとるのでなく、見たものを自分自身に永遠に刻むことではないだろうか。

(13) 祭政一致

> 7 政治には積極的に有権者として関わらない

祭政一致は古代社会におおく見られる政治形態であるという。それは、現代の目から見て未発達意識の現れと見えるだけであり、本来政治は祭政一致であると考えている。ただ、祭り事が形骸化してしまったので、そこにあるものが見えなくなってしまうに過ぎない。見えなければ見えないものと一致も不一致もないのである。祭事とは何か。

人の声だけを聞くのではなく、天の声、地の声を聞き、天地とともに生きることである。

四大元素、土、火、水、気の声聞き、四大元素とともに生きることである。

太陽、月、地球とともに生きることである。銀河系とともに、あるいは宇宙とともに生きることである。

それが祭事であり、ある意味ですべての人は祭事を行っている。

一人ひとりが聞こえる範囲、一人ひとりが見える範囲で祭事を行っていて、その総体が政治なのである。

このように政治をとらえるなら、アーミッシュは関わらないというだろうか。むしろ、積極的に彼らの祭事をおおやけにすべきではないだろうか。

(14) 経験という道標

> 8 共同体外部の異性と交際することはまずない

すべては経験から始まる。すべては規制から始まるのではない。

「共同体外部の異性とは交際しない」という規制をつくったのは、LGBTであった人がつくったのではないであろう。あるいは、共同体外部の異性にこころを奪われた人ではないであろう。

経験しても変わらない規制もあるが、ほとんどの規制は経験して変わる。規制の根底にあるのは経験だからである。だから、

経験してみる

これが第一であるというのがわたしの世界観である。経験してみれば、

共同体外部が共同体内部になるかもしれない。
共同体外部もまたわたしとなるかもしれない。

そして、その時初めて、共同体外部にいる異性を見たのである。

(15) 成人

> 9 ただし、これらの宗教上の制限は成人になるまでは猶予される

> 10 幼児洗礼を認めず、成人して自らの意志で洗礼を受ける

アルクトゥルス宇宙船の科学技官であるエクタラは70万年間太陽系周辺に駐留しているという。ただ彼は自分自身を若造と言っている。

自分はいま70歳であるが、年寄りなのか若造なのか。自分では若造と思っているが、なんとも肉体の衰えが激しく、その意味では年寄りであろう。

宗教上の制限、洗礼の可否を決めるのをアーミッシュは成人になってからというが、わたし自身、今現在が成人といえるのかどうか疑問に思っている。

暦年齢で人は“人に成る”のではない。

だから、あらゆることについて、あらゆる年齢で、自分自身にしたがって決めればよい。そして、ある意味そうしているのである。

どこにも意思はある。
その意思にしたがって自分をつくる。
そして、意思は変わる。
変わってあらたな自分をつくる、かたどる。
その自由、その変容が人間なのだ。

(16) アーミッシュの少女

アーミッシュのことを知ったのは冒頭に書いたアーミッシュの学校での銃乱射事件があつてからである。新聞記事を読んでこれほど世界観が打ちのめされてことはいまだかつてなかった。

アーミッシュの学校は年少者から年長者までひとつの教室で学ぶ。銃撃犯が教室に入り女生徒だけ10人を閉じこめて、彼女たちを撃つたのであるが、閉じこめられた時に年長の13歳の少女が犯人の前に立ち、こう言ったのである。

「わたしを先に撃って、そのかわりみんなを解放して」

彼女は洗脳されていてこういったのか、あるいは深い信仰心がいわせたのか、それはどちらでもよい。それは彼女の問題だ。わたしの問題はこの事実によってわたしの世界が壊れてしまったということだ。